

西方世界とインド洋貿易(6)

——ヘレニズム時代・ローマ帝制初期を中心に——

荻 野 博

IX ローマ帝国時代初期のインド洋貿易 の展開(4) ——南インド方面——

ローマ帝国時代初期には、西北インドの沿岸とならんで、南インドの西海岸が西方世界の商人の来航によってにぎわった地域であった。

南インドは Tungabhadra 川および Krishna 川によってデカン高原からひきはなされた、インド半島南部の地域で、長い間北インドとは異なった、独自の歴史的世界を構成していた。もっともそこには、北インドのアーリア系の文化的影響がおよんできた形跡がうかがわれ、N. Sastri はとくに宗教や倫理思想の面に北方の影響が著しかったといっている¹⁾。しかし、政治的にはインドの統一をなしとげたマウリア朝の時代にも、この地方だけはその征服をまぬがれて、独自の地域を構成していた。また民族的には、この地方はドラヴィダ系のタミール人 Tamils の占拠していた地域で、西暦紀元前後の数世紀間、タミール人の3つの小国家が並立していた。すなわち西部はチェーラ Chēra またはケーララ Kērala と呼ばれる王国が、半島南端から東海岸南部にかけてはパーンディヤ Pāndiya 王国が、またその北方はチョーラ Chola 王国が支配していた²⁾。これらの国々の

名称はアショカ王の摩崖詔勅に見られ³⁾、また前2世紀後半に Kalinga で支配していた Khāravela の碑文には、かれの治世第11年に Tramiradeśasanghātām (タミール諸国連合)を破ったことが刻されているが⁴⁾、その歴史はあまり明らかではない。しかし、これらの3国の間ではひんぱんに戦争がくり返されたことが、タミール語で書かれた多数の古詩からうかがわれ、したがってその境界線にはしばしば変動が見られたもののようである⁵⁾。他方、この地方は物産が豊かで、とくに文明世界の需要する胡椒を多量に産し、また山地には緑色エメラルド(beryl)、その他の貴石類を、さらに南端の海域には真珠を豊富に産した。そのためローマ帝国時代に入ると、エジプトのアレクサンドリアを基地とする西方世界の商人が、インド洋を横断して南インドの西海岸に直航し、盛んにこれらの物産を買い求めたのであって、当時はこの地方はインド洋貿易の一大中心をなしていたのである。

1) ttai にいたるコロマンデル Coromandel 海岸から、西は Coorg の境界まで、すなわちマドラス地方およびその東方の地方を支配していた。(Vincent A. Smith, *The Early History of India from 600 B.C. to the Muhammadan Conquest*, 4th ed., revised by S.M. Edwardes, Oxford, 1924 [reprint, 1967], [以下 Smith], pp. 464-66.)

2) Wilfred H. Schoff, *The Periplus of the Erythraean Sea*, Longmans, 1912 (以下 Schoff), p. 204.

3) N. Sastri, *op. cit.*, p. 115.

4) たとえばトラヴァンコールおよびコチンは、時にはチェーラ王国に、時にはパーンディヤ王国に属したと、S.M. Sastri はいっている。(Cunningham's *Ancient Geography of India*, ed. with Introduction and Notes by Surendranath Majumdar Sastri, Calcutta, 1924, p. 743.)

1) Nilakanta Sastri, *A History of South India from Prehistoric Times to the Fall of Vijayanagar*, 3rd ed., Oxford, 1966, pp. 129-30 & 142.

2) ヴィンセント・スミスによれば、チェーラ王国はのちのマラバール Malabar およびトラヴァンコール Travancore ならびにコチン Cochin の諸地方を支配し、パーンディヤ王国はマドゥラー Madura およびティンネヴェリ Tinnevely 地方ならびにトラヴァンコール地方の一部(インド半島南端のコモリン岬を含む)を支配し、またチョーラ王国は東は Nellore から Pudako- /

南インド沿岸の状況

Periplus Maris Erythraei (『エリュトウラー海案内記』, 以下 *Periplus*) の作者は、南インドの西岸、すなわちマラバール沿岸地帯をリミュリケー Limyrikē⁶⁾ と呼んでいるが、かれはこの沿岸にいくつかの商業地をあげている。その最初にあげられているのは、ナウーラ Naūra およびティンディス Tyndis で、この書にはこれらが「リミュリケー第一の商業地」と記されている⁷⁾。ナウーラについては、Honāvar (14°17' N., 74°27' E.) に比定する説と Cannanore (11°52' N., 75°22' E.) に比定する説がある。前者はその名称の類似から早くから提唱されていたものであるが、ショッフはここがアンドラ王朝とサカ王朝の紛争の地帯になった沿岸にあることを指摘して、ここがタミール人の国の領域ではなかったとしてこれを斥け、カンナノールに比定した。かれはその比定の根拠の1つとして、カンナノールがティベリウス、クラウディウス、およびネロ帝の貨幣の重要な出土地点であることを指摘している。村川堅太郎氏はショッフの説を支持しておられる⁸⁾。*Periplus* にはナウーラがリミュリケー地方にあると記されているだけで、タミール諸国の1つであるチェーラ王国に属しているとは書かれていないが、おそらくこの王国に属していたものと思われる。

次のティンディスについては、*Periplus* にはこの商業地が「ケーロボトゥラスの王国に属し、海に臨んだ著名な村である」と記されている⁹⁾。ケーロボトゥラス Kērobothras については、プリニウスも後述するムージリス Muziris の王が Caelobothras であると書いており、また

プトレマイオスの地理書には Kērobothros の王宮所在地として Karoura があげられている¹⁰⁾。したがって、ケーロボトゥラスはこの商業地を支配していた王の名称のようにもとれるが、この語はサンスクリットの Chēraputra (「Chēra の子」という意味) または Keralaputra をギリシア語化したものであり、チェーラ(ケーララ)王国またはその王朝名か王の称号をさしたものと考えられる¹¹⁾。いずれにしても、ティンディスはチェーラ王国に属した商業地であった。この商業地については、プトレマイオスもリミュリケー地方の記述の冒頭に「都市 Tyndis」としてあげている。ユール Henry Yule はこれを16世紀のはじめにはまだ盛んな貿易地であった Tanūr に比定し、またマックリンドル J. W. McCrindle はそれより数マイル北方の Kaḍaluṇḍi (Kaḍal-tuṇḍi) (11°11' N., 75°49' E.) に比定した。これに対してショッフはそれより南方の Ponnāni (10°48' N., 75°56' E.) に比定している。ポンナーニは同名の川の河口に位置しており、この川はインド西岸を流れる他の諸河川とは異なって、小さな船で奥地への航行が可能であり、またこの川に沿って道路が東西に走っていたようである。奥地に産する胡椒や貴石類は、この川や道路によって河口へ運ばれたのであろう。今日では一般にこのショッフの比定が支持されている¹²⁾。

6) リミュリケーについては、本稿(1) (『流通経済論集』 Vol. 6, No. 4), 40頁, 注73) および本稿(5) (同, Vol. 8, No. 4), 33頁, 注70) 参照。

7) *Periplus*, 53. 村川堅太郎氏著『エリュトウラー海案内記』生活社, 昭和21年(以下「村川氏」)の邦訳による。同著, 117頁。なお以下の *Periplus* の引用も、いずれも村川氏の邦訳によることとする。

8) Schoff, p. 204; 村川氏, 224頁。

9) *Periplus*, 54, 村川氏, 117頁。なおショッフの英訳ではこの部分は次のようになっている。“Tyndis is of the Kingdom of Cerobothra; it is a village in plain sight by the sea.” (Schoff, p. 44.)

10) Plinius, *Naturalis Historiae*, VI, xxvi, 104; Ptolemaios, *Geographikē Huphēgēsis*, VII, 1, 86. なお王宮所在地の Karoura は、コインバトゥール地方の重要な町である Karūr に比定されている。この町は Kāvēri 川の支流である Amarāvati 川の左岸にあり、附近に大きな城塞の廃墟がある。(McCrindle's *Ancient India as Described by Ptolemy: A Facsimile Reprint* ed. with an Introduction, Notes and an Additional Map by Surendranath Majumdar Śāstri, Calcutta, 1927 [以下 McCrindle], pp. 180 & 182.)

11) Schoff, pp. 208-209. なおラッセンはこの王国の支配者の世襲的称号であったと推測している。(Christian Lassen, *Indische Altertumskunde*, Leipzig [以下 Lassen], III, 1858, S. 193.)

12) Ptolemaios, VII, 1, 8; McCrindle, p. 50; Schoff, pp. 204-205; 村川氏, 224頁; Balram Srivastava, *Trade and Commerce in Ancient India from the Earliest Times to c. A.D. 300*, Chowkhamba Sanscrit Series Office, 1960 (以下 Srivastava), p. 90.

Periplus の作者は続いて「これら（ナウラおよびテュンディス——引用者）の後に現在繁栄して居るムージリスとネルキュンダとがある」と述べ、さらにムージリスについて、ここがテュンディスと「同じ王国に属し」、アリーアケー Ariakē, すなわち西北インド方面からくる船やヘルレーネス Hellenes, すなわち西方世界の船によって繁栄していること、「それは河に沿って位し、テュンディスからは河と海とを通じて五百スタディオン離れ、その市のところの（河の口）からは二十スタディオン離れて居る」と書いている¹³⁾。プリニウスもムージリスについて比較的詳細な記事を残しているが、かれはムージリスがバブ・エル・マンデブ海峡に臨むアラビア半島側のオケーリス Okēlis から、インド洋を横断して到着するインドの最初の貿易根拠地であるが、附近に海賊が多く、また商品がとくに豊富というわけでもなく、その上停泊地が陸地から遠く離れていて、小舟で貨物を運ばなければならないので、好ましい寄港地ではないと書いている。またプトレマイオスはリミユリケー地方のところに「商業地 Mouziris」をあげている¹⁴⁾。ムージリスはかつては Mangalore (12°52' N., 74°51' E.) に比定されたが¹⁵⁾、今日では一般に Cranganore (10°14' N., 76°11' E.) に比定されている。たとえば、マックリンド

ルはムージリスは Kaṇḍangalur すなわち Kranganr (Cranganore) の王の居所として、古代の碑文に記された Muyiri-Koḍu の Muyiri に相当するものであるとして、ここを克蘭ガノールに比定し、マラバール地方のすべての伝承は、ここがもっとも古い著名な海港であるとしていると述べている¹⁶⁾。ここは Periyar 川の河口に位置しており、チェーラ王国の古都であった Karour すなわち Vangī にも近い。タミールの古詩に見える Muchiri または Muṣiri は、ムージリスをさしていると考えられるが、これらの古詩の1つには、金を積んだ Yavanas の美しく大きな船が、Periyar 川に白い泡をざぶざぶとたてながら、繁栄している Muchiri の港にやってきて、胡椒を積んで帰ってゆくことがうたわれている¹⁷⁾。上述の Yavanas はギリシア人を意味するサンスクリット語¹⁸⁾で、この詩はムージリスが西方商人の来航でにぎわっていることを物語ってくれる。このほかにもムージリスが貿易港として栄えていたことを示すタミールの古詩があり、西方世界の商人が盛んにこの商業地を訪れたことが推測される。プリニウスはムージリスが好ましい寄港地ではないとして、その悪条件をいろいろあげているが、実際は *Periplus* に述べられているように、ここが当時リミユリケー地方でもっとも繁栄し、かつ西方世界の商人の来航もすこぶる多い、代表的な商業地であったというのが、今日では通説になっている。

13) *Periplus*, 53 & 54. 村川氏, 117頁. なおショッフは「現在繁栄して居る」という部分を, “now of leading importance” と訳している. (Schoff, p. 44) この部分は原文が *πρᾶσσουσαι* と書かれているが, これは他に例のない用法であり, 普通なら *ἐδ̄ πρᾶσσουσαι* と書くべきところであるが, ショッフは Schwanbeck に従って, これを *πρωτεύουσai* (「第一位を占める」という意味) に改めたためである. (村川氏, 224 頁による.) なおアリーアケーおよびそこからムージリスにくる船舶に関しては, 本稿(5), 23頁および43-44頁参照.

14) Plinius, *N.H.*, VI, xxvi, 104; Ptolemaios, VII, 1, 8.

15) たとえばウィリアム・ヴィンセントはマンガロールに比定している. またかれはテュンディスを Barceloor に, またナウールを Onoor (Honāvar) に比定している. (William Vincent, *The Periplus of the Erythraean Sea: Containing an Account of the Navigation of the Ancients, from the Gulf of Elana, in the Red Sea, to the Island of Ceylon*, Part II, London, 1805 [以下 Vincent, Part II.], p. 404.) ラッセンもマンガロールに比定している. (Lassen, III, S. 34.)

16) McCrindle, p. 51. スミス, ショッフ, 村川氏らもいずれもムージリスを克蘭ガノールに比定している. (Smith, pp. 462 & 477; Schoff, pp. 205-208; 村川氏, 225頁.)

17) Errukkaddur Thayan Kannar-Akam, 148. (Radha Kumud Mookerji, *A History of Indian Shipping: A History of the Sea-Borne Trade and Maritime Activity of the Indians from the Earliest Times*, [reprint, Kitab Mahal, 1962], [以下 Mookerji], p. 94 & Srivastava, p. 91 の引用による.)

18) Yavanas はギリシア語でイオニア人を意味する *Ia-vōnes* に由来するものと考えられ, イランを通してインドに伝わったものらしく, 古代ペルシア語ではギリシア人を *Yauna* といっている. またパーリ語では *Yona*, *Yonaka* という. (中村元氏著『インド古代史』下, 春秋社, 昭和41年, 42-43頁.)

ムージリスとならんで「現在繁栄して居る」と記されているネルキュンダ Nelkynda については、*Periplus* にはさらにここが「ムージリスから、同様に河と海とを通じて殆ど五百スタディオン離れて居り、別のパンディオーンの王国に属する。これも亦河に沿うて位し海から約百二十スタディオン距って居る」こと、ついで「此の河の丁度口のところに臨んで別の村のバカレーがあり、船はネルキュンダから沖に出航する際に此处に先づ立ち寄り、船荷を受取る為に投錨地に碇泊するが、これは此の河には浅瀬があつて通航路が深くない為である」と記されている¹⁹⁾。またプリニウスは「Neacyndi 族に属する Becare という、いっそう便利な（ムージリスより——引用者）港」があることを書いている。この Neacyndi はネルキュンダに、また Becare は上述のバカレー Bakarē に相当するものと考えられる。さらにプトレマイオスはリミュリケー地方の記述の中で Bakarei をあげ、また Aioi 族の地方の記述の中で Melkynda をあげているが、Bakarei はバカレー、Melkynda はネルキュンダに相当するものである²⁰⁾。

ネルキュンダについては、レンネル Major Rennel やウィリアム・ヴィンセントは Nelisuram に比定し、マックリンドルもこれにしたがっている²¹⁾。この比定の根拠の1つとなったのは、Nelcynda と Nelisuram の音の類似であったが、ネリスラムはマラパール地方の北境に近いところに位置しているので、ネルキュンダがパーンディヤ王国に属するという *Periplus* の記

事とは矛盾するものと考えられる。そのため今日ではムージリス＝克蘭ガノールを基点として、ここから「河と海とを通じて殆ど五百スタディオン離れて居る」との *Periplus* の記述から、ネルキュンダは Kottayam (9°36' N., 76°31' E.) に比定されている²²⁾。またネルキュンダから川を下った河口にあると記されているバカレーは、通常 Porakād (9°22' N., 76°22' E.) に比定されている²³⁾。ポラカードは Achenkoil 川の河口に位置しており、かつては著名な港であった。また近世に入って、ポルトガルやオランダがインドに進出してくると、かれらはポラカードを貿易根拠地の1つとした。ポルトガルの建設した要塞および商館の遺跡は、今日海でおおわれているが、干潮時には姿を現わすという²⁴⁾。

Periplus の上述の引用文によれば、ネルキュンダはチェーラ王国に属するムージリスとは異なっており、「別のパンディオーンの王国に属」しており、バカレーも同様であったことは、後述する「両商業地の王云々」という記事から知ることができる。パンディオーン Pandiōn は既述のケーロボトゥロスと同様に、ある特定の王の名前ではなく、パーンディヤ王国の国名であり、また歴代の王の称号でもあったと考えられる²⁵⁾。いずれにしても、*Periplus* の書かれたころは、ネルキュンダとバカレーはパーンディヤ王国に属していたことが、この記事によってうかがわ

22) たとえばショッフは、河床や砂州や島がしばしば移動したために、ネルキュンダの正確な位置はたしかではないが、今日のコッタヤムにごく近いところであることは確実であり、コッタヤムは克蘭ガノールからちょうど500スタディオン、すなわち50マイル（約80キロ）のところにありといっている。（Schoff, p. 208）なお村川氏、225頁。

23) たとえばショッフは、ネルキュンダから120スタディオン離れた河口にあると記されている点から見て、バカレーはポラカード以外にはありえず、コッタヤムからポラカードまでの距離は、*Periplus* に記された距離と一致すると述べている。（Schoff, p. 211.）しかし、村川堅太郎氏は海軍水路部の地図ではコッタヤムとポラカードは川で結ばれておらず、また距離も遠すぎるので、ショッフの比定は疑わしく、これより北方に求めるべきであろうと述べておられる。（村川氏、227頁。）また K. Pillai や S.K. Aiyangar はコッタヤムに近い Vaikarai 村に比定している。（Srivastava, p. 92 による。）

24) Schoff, pp. 211-12.

25) Schoff, p. 211; 村川氏、226頁。

19) *Periplus*, 54 & 55, 村川氏, 117-18頁。

20) Plinius, *N.H.*, VI, xxvi, 105; Ptolemaios, VII, 1, 8 & 9. なおプトレマイオスの書いている Aioi 族は、トラヴェンコール地方の南部を占拠していた種族で、Aioi は多分サンスクリットの「蛇」を意味する Ahi の音訳で、このことはかれらの間で蛇の信仰が行なわれていたことを示すものであらうと、マックリンドルは推測している。（McCrimble, p. 54.）

21) Vincent, Part II, pp. 402-404; McCrimble, p. 54. なおヴィンセントはネルキュンダを Nelisuram であると推定し、これをもとにして *Periplus* に記された距離から、ムージリスを Mangaloor に、さらにデュンディスを Barceloor に比定したのである。（注15）参照）

れるのであって、当時はこの王国がこの方面まで勢力を延ばしていたことが知られるのである。また *Periplus* には上述の引用文に続いて、「両商業地（ネルキュンダおよびバカレー——引用者）の王自身は内地に住んで居る」と書かれている。またプリニウスは Becare が Pandion 王に属し、「その首都はこの港からずっと遠隔の内地の Modura という町」であると書いており、プトレマイオスは Pandionoi の内地の都市の1つに Modura をあげ、「Pandion の王都」と記している²⁶⁾。この Modura は今日の Madurā（または Mathurā）(9°55'N., 78°7'E.) に比定されている。パーンディヤ王国の首府はもともとは後述する Korkai（または Kolkai）にあったが、のちにマドゥラーに移されたのであって、当時はマドゥラーが首都であったことが、以上の記述からうかがわれるわけである。この町は Vagigai 川のほとりにあり、上述の両商業地に道が通じ、またチェーラ王国の首都の Vangi にも道が通じていた。玄奘(602-64)が伝聞国の1つとして『大唐西域記』に書いている秣羅矩吒国の都城はマドゥラーであると考えられているが、この書にはこの国が周囲五千余里、国の大都城は周囲が四十余里で、「土田烏鹵。地利不滋。海渚諸珍。多聚此国。」と記されている²⁷⁾。

Periplus の作者は次いで以上にあげた諸商業地の輸出入品について述べ(第56節)、次いですでにIVで述べた、ヒッパロス Hippalos と呼ばれる南西の季節風を利用する太平洋横断航路について述べ(第57節)、そのあとで第58節以下にバカレー以南の西海岸からさらに東海岸の状況について筆を進めている。

この部分では *Periplus* の作者はまずバカレーの南方にピュルロン Pyrrhon 山と別のパラ

リアー Paraliā と呼ばれる地方が真南に延びており、「此の地方には王パンディオーンの所有にかゝる真珠採取場やコルコイと呼ばれる市もある」ことを記し、さらに最初の場所はバリタ Balita と呼ばれ、そこには「よい碇泊処と海に臨んだ村」があること、その次にはコマレイ Komarei と呼ばれる場所があることを書いている²⁸⁾。以上の記述のうち、パンディオーン王の真珠採取場およびコルコイに関する記述は、次の第59節にも同じような記事が記されていて重複するので、それが誤ってここへ挿入されたのではなかろうかと考えられており、ショッフの英訳にはこの部分が削除されている²⁹⁾。

まずピュルロン山については、他の古典には見られないが、ギリシア語の πυρρός（「火炎色の」という意味）に由来するものと考えられ、ショッフはこれを Dark Red Mountain と訳している。これは地質学者が Warakalli Beds と呼んでいる、砂岩と紅土(laterite)からなる一連の絶壁である、いわゆる「赤い涯」をさしているものと考えられている。このような絶壁は Varkallai (8°42'N., 76°43'E.) および Anjengo (8°40'N., 76°45'E.) 附近に見られる³⁰⁾。またパラリアーはやはり「海岸」を意味するギリシア語(παράλια)で、コールドウェルはこれをタミール語で「海岸」を意味する Karei の翻訳であろうと推定している。ショッフは *Periplus* のパラリアーは、トラヴァンコールおよびティンネヴェリ地方の海岸のうち、コモリン岬の周辺から Adam's Bridge（マンナル湾の北方でセイロン島に向かって突き出ている岬）あたりまでの海岸地方をさしたものであるとしている³¹⁾。次に「よい碇泊処と海に臨んだ村」があると書かれているバリタは、プトレマイオスが Aioi 族の地方にあげている Bammala に相当するものらしく、上述の Varkallai あたりに比定されている³²⁾。

26) *Periplus*, 55. 村川氏, 118頁; Plinius, *N. H.*, VI, xxvi, 105; Ptolemaios, VII, 1, 89.

27) Smith, pp. 468-69; Schoff, p. 221; 村川氏, 226-27頁; McCrindle, p. 184; Srivastava, p. 92; 『大唐西域記』卷第十. なお秣羅矩吒国の比定については、高桑駒吉氏著『大唐西域記に記せる東南印度諸国の研究』森江書店、大正15年、293頁以下に詳細な研究がある。

28) *Periplus*, 58, 村川氏, 120頁.

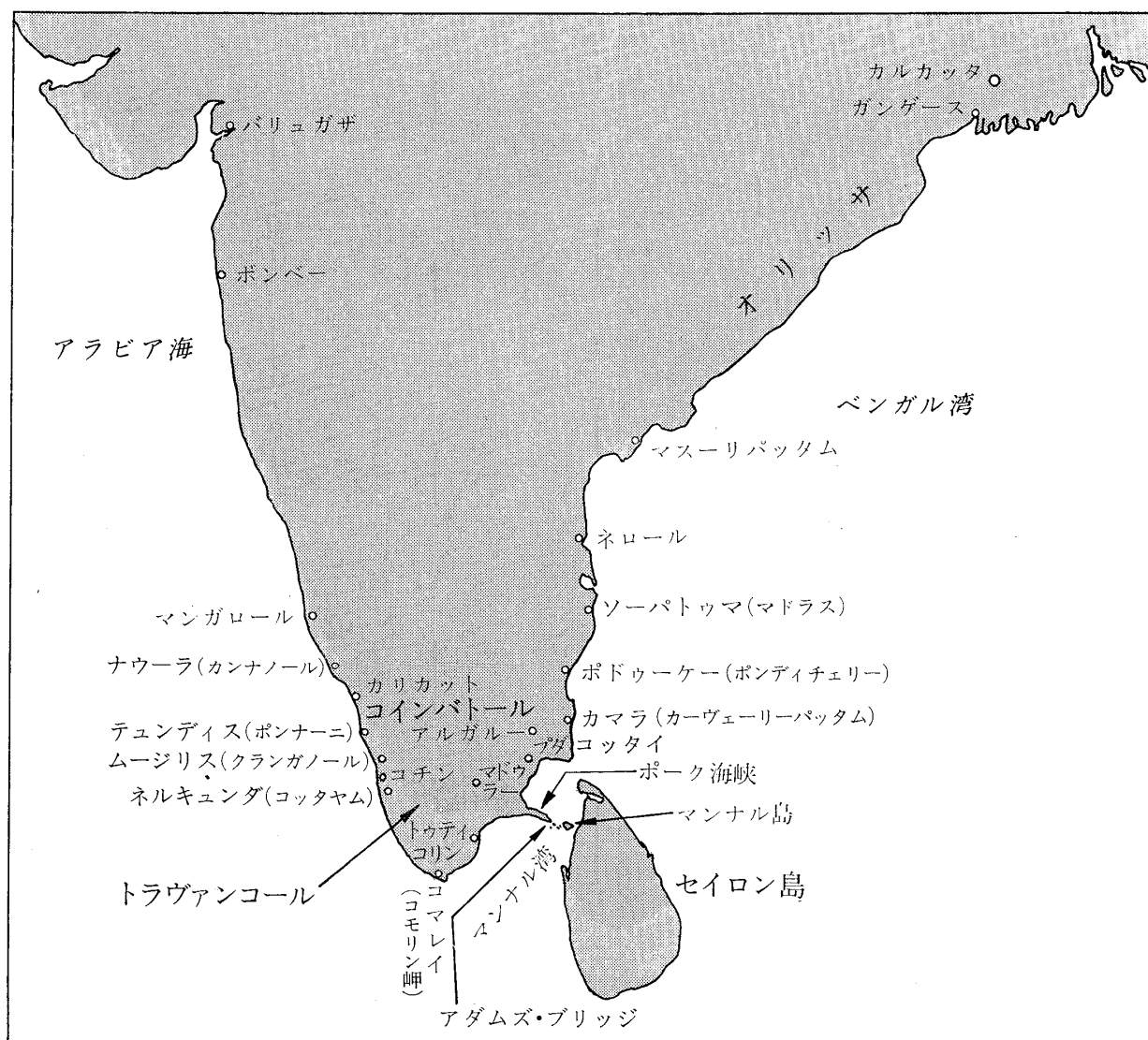
29) 村川氏, 234頁; Schoff, p. 46.

30) Schoff, p. 234; 村川氏, 234頁.

31) Caldwell, *Dravidian Grammar*, p. 56 (Schoff による); Schoff, p. 234; 村川氏, 234頁.

32) Ptolemaios, VII, 1, 9; McCrindle, p. 55; Schoff, pp. 234-35; 村川氏, 234頁.

インド略図



またコマレイはプトレマイオスが上述の Bammala につづいて「岬および町」としてあげている Komaria に相当するものと考えられ、インド半島南端のコモリン岬(8°5'N., 77°33'E.)に比定されている。*Periplus* にはここに番所³³⁾と港があること、また「一生涯清浄な生活をしようと望む人々は此処にやって来て沐浴を行ひ、独身者として此の地に留るのである。女達も同じことを行ふ。と言ふのは女神が嘗て其処に留

って沐浴をしたと伝えられて居るから」と記されている³⁴⁾。*Periplus* に宗教的記事が見られるのはこの部分だけであるが、Komarei はサンスクリットで「処女」を意味する kumāri のタミール語形と考えられ、それはシヴァ神の配偶者である女神 Durgā (Pārvātī) の異名である。ここは南インドでもっとも重要な巡礼の場所の1つで、ユールによれば今日でもこの女神のために月例の沐浴が行なわれているという³⁵⁾。

33) 写本には βριαριον とあるが、村川氏は Frisk の採用した φρούριον に従って「番所」と訳された。ショップは Müller に従って ἄκρον (「岬」とか「出鼻」の意味)を採用し、“the Cape of Comari”と訳している。(村川氏, 235頁; Schoff, p. 46.)

34) *Periplus*, 58, 村川氏, 120-21頁。

35) Schoff, p. 235; 村川氏, 235頁; *The Book of Ser Marco Polo the Venetian Concerning the Kingdoms and Marvels of the East*, tr. and ed., with Notes by Colonel Sir Henry Yule, 3rd ed., Revised thro- /

Periplus の作者はコマレイからさらに「南に」コルコイ Kolchoi という地名をあげ、そこにいたるまでの地帯には「真珠の採取場があり、罪人たちがその仕事に当って」おり、パンディオン王の所有に属すること、コルコイの次には「別のアイギアロスと言ふ、湾に沿うた地方が続く、その内地はアルガルーと呼ばれ」、「エーピオドーロスの島で採集された真珠はただ此処だけで(買ふことが出来る)」こと、「また此の地方からはアルガルー織と呼ばれる上質綿布が輸出される」ことを記している³⁶⁾。

このように、*Periplus* の作者はコモリン岬に比定されたコマレイからさらに南方にまで、陸地が続いているように書いているが、コモリン岬はインド半島の最南端をなす岬であり、したがって「南に」と書いてあるところは、実際は「東に」または「北東に」と書くべきであろう。この点から見て、作者はこの方面では航海の経験がなかったものと考えられる。ところでコマレイの「南に」とあるとされているコルコイについては、プトレマイオスも Kareoi 地方の記述の中で、「真珠採取場のある Kolchikos 湾」をあげ、またその中の商業地として Kolchoi をあげている。マックリンドルによれば、Kareoi 地方は南ティンネヴェリ地方に相当し、karei はタミール語で「海岸」を意味している。また Kolchikos 湾はインド半島とセイロン島の間の今日のマンナル Mannar 湾であると考えられ、コルコイはこの湾に沿った Kayal から 2~3 マイル内地に入ったところに位置している Korkai (または Kolkai) (8°40'N., 78°5'E.) に比定されている。タミールの伝承によれば、コルカイはパーンディヤ王国発祥の地であり、この王国がマドゥラーに遷都するまでは、ここが首都であった。またこの町はパーンディヤ王国の主要な海港の1つでもあった。しかし、海の後退につれてその重要性は失われ、中世にはカヤ

ルがコルカイにとって代ったが、今日ではさらに Tuticorin がこれにとって代っている。*Periplus* の作者やプトレマイオスは、この地方の海で真珠の採取が行なわれることを書いているが、中世においてもマンナル湾で盛んに真珠の採取が行なわれていたことが、後述するように、マルコ・ポーロによって伝えられており、今日でも採取が行なわれている³⁷⁾。

コルコイの次にあげられている「別のアイギアロスと言ふ、湾に沿うた地方」のアイギアロス *Aἰγιάλος* は、ギリシア語で「海岸」という意味であり、ショッフはこの部分を “another district called the Coast Country which lies on a bay” と訳している。この「海岸地方」は「別のアイギアロスと言ふ云々」と書かれているところから見て、マンナル湾とは別のところであると考えられ、この湾の北端に突き出ている Adam's Bridge の北方で、インド本土とセイロン島をわけているポーク Palk 海峡に沿った本土側の沿岸地方を指すものとされている。またプトレマイオスが Pandion の地方にあげている Orgalikos 湾は、ポーク海峡をさすものと思われる。もっともショッフは、当時はこの地方はパーンディヤ王国ではなくて、チョーラ王国に属していたと考え、両国の境界線は Valiyar 川 (10°8'N.) か、これよりいっそう南方の Vaigai 川 (9°20'N.) であったろうと推定している³⁸⁾。

次にこの海岸地方の内地にあるとされているアルガルー Argalū は、プトレマイオスが Orgalikos 湾内にあげている「都市 Argeirou」に相当するものであろう。ラッセンはこれを今日の Deviapatam (Devipatnam) に比定し、また Berthelot は Negapatam 附近にこれを求めているが、これらは海岸に位置していて、*Periplus* の「内地」というのとは一致しない。ショッフはこれを今日 Trichinopoly (10°49'N.,

throughout in the Light of Recent Discoveries by Henri Cordier (以下 Yule, *Marco Polo*), Vol. II, New York, 1903, pp. 382-83.

36) *Periplus*, 59, 村川氏, 121頁.

37) Ptolemaios, VII, 1, 10; McCrindle, pp. 57-59; Schoff, pp. 237-39; 村川氏, 236頁; Marco Polo, III, xvi (Yule, *Marco Polo*, Vol. II, pp. 331-32.)

38) 村川氏, 236頁; Schoff, pp. 46 & 241; Ptolemaios, VII, 1, 11; McCrindle, pp. 59-60.

78°42'E.) の町の一部をなしている Uraiyr をギリシア語化したものであろうと推定している。この Uraiyr はチョーラ王国の首都であった³⁹⁾。またここだけで買うことのできる真珠の産地とされているエーピオドーロス Epiodōros の島については、ショップはこれを ἡπειρος (「陸地」とか「本土」という意味) に改めて, “the coast thereabouts” と訳し, Adam’s Bridge 北方のポーク海峡の沿岸地帯の真珠採取場を述べたものとしている。これに対して村川堅太郎氏は Müller に従って, これを Ἡλιοδώρου の誤写であらうとされ, この島をプリニウスがセイロン島とコモリン岬の中間にあると書いている Solis insula (「太陽島」という意味) に相当するものと考えられて, これをマンナル島に比定しておられる。マンナル島では今日でも盛んに真珠の採取が行なわれている⁴⁰⁾。Periplus にはさらにこの地方からアルガルー織という上質綿布が輸出されることが記されているが, Trichinopoly や Tanjore の綿織物工業は古来有名で, 中世においては金糸の織物が盛んにつくられて, イスラム商人がこれを買求めた。ショップはローマ帝国に輸出された上質綿織物の一部は, このチョーラ王国産のものであったことは疑いがないと述べている⁴¹⁾。

Periplus の作者は次に上述の地方の商業地として比較的著名なものを, 順次に3つあげている。すなわちカマラ Kamara, ポドゥーケー Podūkē, およびソーパトゥマ Sopatma がこれである⁴²⁾。まず最初にあげられたカマラは, プトレマイオスの記載している Khabēros 川の河口および商業地 Khabēris に相当するものと考えられる。Khabēros 川は今日の Kāvērī 川であり, Khabēris および Kamara は Pudu-Kāvērī (「新カーヴェーリー」という意味) 川の河口の Tranquebar からやや北方に位置している

Kāvērīpaṭṭam (Kaviripaddinam または Pukar) に比定されている⁴³⁾。古代のタミールの詩人は, この商業地について海外の諸所の商人がさまざまな商品を運んでくる, すこぶる活気を呈した町であるとうたっており, そこには Yavanas の居留地があつて, そこでは多数の魅力ある商品がいつでもならべられ, 販売されていること, そのほかの海を越えてやってくる外国人商人の街もあること, 岸边にはプラットフォームや倉庫が設けられ, 夜になると煉瓦とモルタルでつくられた灯台に赤々と火がともされて, 入港する船を導くことなどを伝えている⁴⁴⁾。

次のポドゥーケーは, プトレマイオスも「商業地 Podoukē」としてあげており, W. ヴィンセントはカーヴェーリー川とマドラスとの間の沿岸のどこかの地点であらうと推測しており, またユールはこれを Pulikāt に比定したが, マックリンドルやショップはそれよりやや北方の Puduchchēri (タミール語で「新市」という意味), すなわち今日のポンディチェリー Pondicherry (11°56'N., 79°49'E.) に比定している⁴⁵⁾。もっとも今日ではポンディチェリーの南方2マイル(3.2キロ)の Virampatnam 村に近い Arikamedu から, ローマ帝国時代初期の西方世界と密接な貿易関係にあったと考えられる商業地の遺跡が発見されており, したがって正確にはここがポドゥーケーの遺跡であると, いまでは考えられている。

この遺跡が注目されるようになったのは1937年のことで, この年附近の子供たちがこの遺跡でひろった珠玉やガラス玉が, ポンディチェリー大学教授で, 考古学に関心をもっている G. Jouveau-Dubreuil の手に渡り, その1つにアウグストゥス帝の頭部が彫刻されていることが

39) Ptolemaios, VII, 1, 11; Lassen, III, S. 210; 村川氏, 236頁; Schoff, pp. 241-42.

40) Schoff, pp. 46 & 241; 村川氏, 236-37頁; Plinius, N.H., VI, xxiv, 86.

41) Schoff, p. 242; 村川氏, 237頁.

42) Periplus, 60; 村川氏, 121-22頁.

43) Ptolemaios, VII, 1, 13; Vincent, Part II, p. 472; McCrindle, p. 65. なおショップおよび村川氏は Kamara および Khabēris をカーヴェーリー河口の1つに位置している Kārikāl (10°55'N., 79°50'E.) あたりに比定しておられる。(Schoff, p. 242; 村川氏, 237頁.)

44) Mookerji, pp. 94-96 & Srivastava, p. 93.

45) Ptolemaios, VII, 1, 14; Vincent, Part II, p. 472; McCrindle, p. 67; Schoff, p. 242; 村川氏, 237-38頁.

判明してからのことである。この遺跡は Gingee もしくは Verāhanadī (注46)の Casal の発掘報告では Aryancoupom) と呼ばれる川の河口が砂州でふさがれて潟をなしているところの東側にあり、水面から20フィート(約6メートル)ほど高くなった急斜面に、煉瓦を積み重ねた建造物のぎざぎざした末端が突き出ている。1941年フランス人の手によって、この遺跡の南部と北部の2地点で小規模な発掘が行なわれ、ローマの共和制末期から帝国時代初期にかけて西方世界でつくられた赤釉を施したアレティウム土器(Aretine ware) の破片が発見され、また多数の建造物の遺構のあることが判明した。その後1945年4月から7月にかけて、当時インドの Director-General of Archaeology の職にあった Sir Mortimer Wheeler が A. Ghosh, その他のインド人学者の協力をえて、同様に北部および南部の2地点で本格的な発掘を行ない、さらに1947~48年には Henri Marchal (当時 Directeur Honoraire du Service Archéologique d'Indochine) の指導のもとに、J.M. Casal 夫妻らによって、同じく北部、南部の2地点で発掘が行なわれた⁴⁶⁾。

これらの発掘によって、この遺跡はもともとはこの川の提供する深い避難所を利用した漁村であったと推定され、初期の層からはマイソールの巨石墳墓やその他のところで発見された土器と密接な関連をもった、内側と外側の上部は

黒く、他の部分は赤色の粗末な土器が発見されたが、堅固な建造物の遺構は認められなかった。しかし、その上の層からは、これらの土器とともに内側の平たい底部にルーレット風の同心円の文様を施し、口縁部が鳥のくちばしのように内側に湾曲している、西方世界から送られたと考えられる良質の土器(rouletted black ware) が出土し、そのほか熔鉱の行なわれた痕跡を示す鉄滓、灰、ルツボ、釘、銅線等、ガラスの玉や塊、紫水晶、紅玉髓、メノウ、水晶などの貴石類の細工品や半製品や未加工の原石、象牙細工の破片などが多量に発見されて、これら各種の工業もここで行なわれていたことが推測された。また牛科の動物の骨に加工を施し、中央に刻み目をつけた半製品が発見された。興味深いことは、これと同類のものと考えられる完成品が、ローマのパラティヌス丘の Casa Republicana degli Griffi の下の層から発見され、それは発掘者によって前2世紀末のものと推定されている。アリカメドゥでこれの半製品を発見したカザルは、インドで半製品が発見されたことから、これらはインドでつくられたものと考えられるとして、早くも前2世紀に「すくなくともエピソード的な」貿易関係が、インドとローマとの間にあったと推定している⁴⁷⁾。これらのほかアリカメドゥの遺跡からは、ブドウ酒やオリーブ油の容器として使用されたと考えられる、2つの把手のあるアムボラ amphora, および赤釉を施したアレティウム土器(その一部には陶工の名前が刻されていた)の2種類の、西方世界でつくられた土器も発見され、この遺跡が西方世界と密接な貿易関係をもった商業地として発展していったことが明らかとなった。とくにアレティウム土器は前1世紀の間にイタリアでつくられはじめ、後1世紀の中葉以前にその生産が停止されているので、この土器の存在がこの遺跡の絶対年代推定の手掛りとなり、ウィーラーはアレティウム土器のアリカメドゥへの輸入が、おそらく紀元20~50年ごろに行なわれ

46) アリカメドゥの発掘については、ウィーラーおよびカザルによって、次の報告が刊行されている。R. E. M. Wheeler, with Contributions by A. Ghosh and Krishna Deva, "Arikamedu: An Indo-Roman Trading-Station on the East Coast of India" (*Ancient India: Bulletin of the Archaeological Survey of India*, No. 2, July, 1946) (以下 Wheeler, Arikamedu); J.M. Casal, *Fouilles de Virampatnam-Arikamedu: rapport de l'Inde et de l'Occident aux environs de l'ère chrétienne*, Imprimerie Nationale, Paris, 1949 (以下 Casal). なお Wheeler, *Rome beyond the Imperial Frontiers*, London, 1954 (以下 Wheeler, *Rome*) (糸賀昌昭氏訳『大ローマ帝国の膨脹』みすず書房, 昭和33年)にこの遺跡の発掘の状況や出土品、この遺跡のもつ歴史的重要性などについて、簡潔な解説がある。また竹島淳夫氏「羅馬帝国の印度貿易」(『古代学』第3巻, 第3号, 1954年)にもこの発掘の紹介がある。

47) Casal, p. 29.

たものと推定した。かれはまた西方世界のインド貿易の発展の主要な契機となったのは、アウグストゥス帝による地中海世界の統一であるとして、この遺跡が西方世界と密接な貿易関係をもつようになったのは、前1世紀末もしくは後1世紀はじめからのことであり、とくに後1世紀はじめからとするのが合理的であろうと推定している。さらにかれはこの遺跡の建造物のほとんどが、アレティウム土器の輸入の終る紀元50年ごろより以後のものであること、アムポラの破片はアレティウム土器の発見された層より下の層から発見されるばかりでなく、上の層からもひきつづき出土していることを指摘しており、さらにこの遺跡の堆積状態から見て、その最終年代を紀元200年ごろと推定している⁴⁸⁾。いずれにしても、アリカメドゥは西方世界との貿易の進展とともに、その様相を改めて、単なる漁村から商業地へと発展していったことが、発掘の結果明らかとなったのであって、ウィーラーに続いてこの遺跡の発掘を行なったカザルは、この集落の漁村から商業地への転換は、紀元1世紀のはじめ、まず北部の河口附近からはじまり、1世紀の末から2世紀にかけてしだいに南部へと発展していったものであろうと推定している⁴⁹⁾。なお北部の発掘では長さ150フィート（約46メートル）以上の堅固な煉瓦造りの建造物が発見されたが、これは1世紀の中ごろ建設された倉庫であろうと推定された。また南部の発掘では、煉瓦と木材で造られた壁で囲まれた2つの中庭が発掘されたが、そこでは煉瓦造りの大きな水槽や給水および排水用の暗渠、それに井戸が発見され、ここは染色工場の跡であろうと推定されている。おそらくこの地方でつくられる木綿織物を染色したところと思われる⁵⁰⁾。

次に *Periplus* にあげられた第3の商業地であるソーパトゥマについては、これに該当する

と思われる地名は、プトレマイオスの地理書には見当たらない。ソーパトゥマはサンスクリットの「よき町」を意味する *Su-patana* の音訳であろうと考えられているが、それが今日のどこに当るかは明らかではない。ミュラーやショップはいちおう今日のマドラス *Madras* (13°4'N., 80°15'E.) に比定している⁵¹⁾。

Periplus には以上にあげた3つの商業地は、「リミュリケーや北方から航海して来る人達が上陸する碇泊地」であり、また「これらの場処にはリミュリケーで出来たものが総て輸入され、また此处にはエジプトからいつでも運ばれる品物の大部分と、リミュリケーから輸出され此の海岸地方を通じて供給される品物の大抵の種類が到着する」と記されている⁵²⁾。この記事によって、コロマンデル海岸に位置しているこれらの商業地は、マラバール地方や北方のおそらくガンジス河口方面との間に海上の往来や貿易が行なわれ、またリミュリケー地方や西方世界産の品物がもたらされて、活況を呈していたことがうかがわれるのであって、アリカメドゥの発掘は、正に *Periplus* のこの記事を裏書きしてくれたものといつてよからう。

Periplus にはさらに上述の3商業地のあるあたりの海域で使用された3種類の船舶についての記事も見られる。すなわち「リミュリケー迄陸地に沿うて航行する此の地方特有の船」、「非常に大きな独木舟を繋ぎ合はせた」サンガラ *sangara* とと呼ばれる船、クリューサー *Chryse* およびガンゲース *Gangēs* に渡航する、きわめて大型のコランディオポンタ *Kolandiophonta* と呼ばれる船の3者がこれである⁵³⁾。第一の「此の地方特有の船」は「リミュリケー迄陸地に沿うて航行する」と書かれているので、沿岸航海用の比較的小型の船であろうと推測され、おそらく今日でも南インドやセイロン島で使用されている、丸木船に側板と舷外浮材 (*outrigger*) をとりつけたものであろうと考えられ

48) Wheeler, Arikamedu, pp. 22-24.

49) Casal, p. 31.

50) Wheeler, Arikamedu, pp. 24-34; Casal, pp. 16 & 22-24.

51) Schoff, p. 242; 村川氏, 238頁.

52) *Periplus*, 60; 村川氏, 121-22頁.

53) *Periplus*, 60; 村川氏, 122頁.

る⁵⁴⁾。第2のサンガラは、このような丸木船を2つならべてつなぎあわせたものと考えられ、これに屋根をとりつけたものが、マライ、東インド、南インドで今日用いられている。サンガラという名称については、サンスクリットの「筏」を意味する *samghādam* か「交易」を意味する *sangāra*、もしくはマラバール地方でこの種の *double-canoes* をさす *jangār* などとの関連が考えられているが、Heeren はこの語をマライ起源のものとしており、ショッフはこの種の型の船がマライ諸島で広く用いられていることから、Heeren の説を支持している⁵⁵⁾。第3の *kolandiophonta* の *phonta* は、写本の誤りかとも考えられており、ショッフの英訳では単に *colandia* とされているが、サンスクリットの *kolāntarapata* (「対岸ゆきの船」という意味) の音訳かとも考えられる。*Periplus* にはこれがクリューセーやガンゲース方面に航行する大型の船と記されているが、後述するように、クリューセーはマライ半島を、またガンゲースはガンジス河口地帯のベンガル地方をさしていると考えられる。すなわちこの大型船は、遠隔なマライ半島や北方のガンジス河口方面へ渡航するのに使用されたもので、プトレマイオスは *Ma-isōlia* 地方の記述の中で「クリューセーゆきの船の出発点」をあげている。この「出発点」はコロマンデル沿岸のどこかの港をさすと考えられるものもあるが、ユールはインドの沿海で航路を東にかえてベンガル湾に乗り出す海上の地点であると考え、これを北緯 18°54' の Mahendra 山麓を流れる Baroua という小さな川の河口あたりであろうと推定しており、マックリンドルはこれを支持している。またセデスは西暦紀元前後にインド人のマライ、インドネシア方面への商業的進出が著しくなってきたことを指摘するとともに、これを促進した原因の1つとして、ペルシア湾方面からの造船技術の影響をあげ、これによって600~700人乗りの大型船舶がつく

られるようになったと述べている。いずれにしても、コランディオポントは遠洋航海用の大型の船舶であり、ショッフはこれを中国のジャンクに類似したものであったろうと推定している⁵⁶⁾。これらの3種類の土着の船舶の存在は、当時南インドの海上活動が相当に活発であったことを推測させるのであって、当時はコモリン岬をまわってマラバール沿岸とコロマンデル沿岸との間に土着の船舶による海上の往来が行なわれるとともに、さらにガンジス河口方面やマライ半島方面との間にも海上の往来が見られたことが知られるのである。

セイロン島、インド北東岸およびそれ以東の状況

Periplus の作者は以上のようにタミールの3国が並立していた南インド沿岸の状況を述べたあとで、さらに記述を続け、「此の後の地方(上述の3つの商業地のある地方——引用者)の辺で、今や航路が東に向って曲ると、大海中に西に向ってパラシムンドゥーと呼ばれ、昔の人々からはタプロバネーと呼ばれた島が横たはって居る」と書いている。ここに記されたパラシムンドゥー *Palaisimundū* およびタプロバネー *Taprobanē* は、今日のセイロン島をさしているとされている。このことは諸学者の一致した見解であるが、さきに述べたカマラやポドゥーケーの比定が正しいとすれば、そのあたりで航路が東に曲った大海中に西に向かってこの島が位置しているとの *Periplus* の記述は、今日の地理的知識からすれば明らかに誤っており、作者がこの方面を航海した経験のなかったことを示してくれる。また作者はこの島がすこぶる大きく、ほとんどアフリカ東海岸に達するほどであると考えていたことが、以上の記述に続いて、「此の島の北に面した部分は渡航者にとり一日(の航程であるが、南部はもっと西に延びて)、殆どその対岸であるアザニアーにまで達して居

54) Schoff, p. 243; 村川氏, 238頁.

55) Schoff, p. 243; 村川氏, 238頁.

56) Schoff, p. 246; 村川氏, 238頁; Ptolemaios, VII, 1, 15; McCrindle, p. 69; G. Coedès, *The Indianized States of Southeast Asia (Les États hindouisés d'Indochine et d'Indonésie, 1948.)*, tr. by S. B. Cowing, Honolulu, 1968, pp. 20-21.

る」と書いていることからうかがわれるが⁵⁷⁾、この記述も誤りであると考えられる。

パライシムーンドウーという名称は、サンスクリットの Pāli-simunta (「聖法の頭」Haupt des heiligen Gesetzes という意味) の音訳であろうとラッセンは説いており、そうだとすれば、この名称はこの島へ仏教が伝わった以後のもの——セイロン島への仏教の伝来はアショカ王以後のこととされている——と考えられるが、この語の解釈についてはさまざまな見解が出されており、マックリンドルはこの語に対する満足な解答はまだ見当たらないといっている。またタプロバネーは同様にサンスクリットの Tāmaraparṇī (「赤い葉」という意味) の音訳であるとされ、この名称はセイロン島へはじめて植民を行なったと伝えられる Vijaya が、この島へ上陸した地点に名づけたもので、のちにそれが島全体の名称となったと伝えられている。もっともセイロン島の名称はしばしば変化したものらしく、『ラーマヤナ』、その他のサンスクリットの古文獻には Laṅkā と記されており、またプトレマイオスは「タプロバネー島は昔は Simoundou と呼ばれたが、いまは Salikē と呼ばれる」と書いている。この Salikē は同様にセイロン島をさすサンスクリットの Simhala、パーリ語形の Sihala (「ライオン」を意味する Simha の派生語) に由来するものと考えられている。漢籍に見られる「僧伽羅」、「私訶条」はやはりセイロン島をさすと考えられるが、これらは上述の Simhala の音訳であり、またやはりセイロン島をさす「獅子国」、「師子国」はこれを意識したものであると考えられる⁵⁸⁾。

セイロン島については古典作家たちも早くから言及している。オネシクリトスはタプロバネーは大きさが 5,000 スタディオンで、本土から 20 日航程のところであり、そこへの航行は困難

であるとしており、メガステネスはタプロバネーは川によって本土からわけられ、インドよりも多量の金と大きな真珠を産すると書いている。またエラトステネスはやはりタプロバネーの名称で、インドの最南部から南へ 7 日航程の公海中にある島で、その長さはエティオピアの方向に向かって 8,000 スタディオンであり、象を産すると書いている⁵⁹⁾。しかし、セイロン島についてもっとも詳細な記事を残しているのはプリニウスである。かれは紅海方面の徴税請負人 Annius Plocamus の手代である解放奴隷が、アラビア半島を回航中、カルマニアのかなたの北方から強風に吹き流されてセイロン島に漂着し、かれを助けて厚遇してくれたこの島の王にもっていたローマの貨幣を見せたところ、なん人も皇帝の発行した貨幣が、いずれも重量がひとしかつたので、その誠実さに感歎した王が、ローマとの友好を求めて 4 人の使節をクラウディウス帝のもとへ派遣したことを記し、さらにこれらの使節からセイロン島の事情を聞いて、さまざまなことがわかったと述べて、詳細にこの島のことを記している。すなわちこの島には 500 の都市があり、そのうちもっとも著名なものが Palaesimundus——*Periplus* ではこれが島名となっている——で、そこは王宮の所在地であること、同名の川がこの町の近くの港で海に注いでいること、インドでもっとも近いコモリン岬までは 4 日航程で、その航行の途中 Solis (太陽) 島を通過すること、この島はインドの南東にあり、インド側の島の長さが 1,250 マイルあること、そのほか島の風俗・習慣等について詳細に述べている⁶⁰⁾。

59) オネシクリトスおよびエラトステネスはストラボンの、メガステネスはプリニウスの引用による。(Strabon, XV, 1, 14-15; Plinius, N.H., VI, xxiv, 81.)

60) Plinius, N.H., VI, xxiv, 84-91. なお東晋の入竺僧法顯 (337-422) はセイロン島 (かれはこれを「師子国」と書いている) に 2 年間滞在したが、その間の見聞にもとづいて、この島について次のように書いている。「其国(師子国——引用者)本在洲上。東西五十由延南北三十由延。左右小洲乃百数。其間相去或十里二十里或二百里。皆統属大洲。多出珍宝・珠璣。有摩尼珠之地。方可十里。王使人守護。若有探者十分取三。其国本無人民。正有鬼神及竜居之。諸国

57) *Periplus*, 61. 村川氏, 122 頁。なお、アザニア Azania については本稿 (3) (『流通経済論集』Vol. 7, No. 3.), 75 頁以下を参照。

58) Lassen, I, 1867, S. 240; McCrindle, pp. 251-54; Schoff, pp. 249-52; 村川氏, 239-40 頁; Ptolemaios, VII, 4, 1.

以上に述べたように、プリニウスはセイロン島について相当に進んだ知識をもっていたのに反して、実際家である *Periplus* の作者は、この島の地理的位置や大きさについてすこぶる誤った観念をもっていた。ただし、この島の産物については、かれは「真珠と透明な石と上質綿布と亀甲とを産する」と書いており⁶¹⁾、この点にかれの実験家としての面目をうかがうことができよう。

Periplus の作者はセイロン島について述べたあとで、再びコロマンデル沿岸地方の記述に移り、「これらの場処では長い距離に亘って内陸の前に延びてマサリアー地方が横たはり、其処では上質綿布を多量に産する」と書いている⁶²⁾。ここにいう「これらの場処」とは、既述の3商業地(カマラ、ポドゥーケー、ソーバトゥマ)の北方の沿岸を漠然とさしているように思われ、そこに長い距離にわたって延びている沿岸地帯を、作者はマサリアー Masaliā 地方と呼んでいるように解される。プトレマイオスがポドゥーケーを含む Arouarnoi (Arvarnoi) 地方の北方にあげている Maisōlia 地方は、これに相当するものと考えられ、そこには Maisōlos 河口も記されている。マックリンドルはこの Maisōlia を Kṛishṇā 川と Gōdāvarī 川の間の沿岸から、さらに Paloura 附近あたりまでをさしている

としており、サンスクリットの Machhliṭatam (「魚の町」という意味)、すなわち今日の Masulipatṭam (16°11'N., 81°8'E.) にその名をとどめているといっている。ショッフはボンベイ鉄道が建設されるまでは、Masulipatṭam はデカン地方へ貨物を供給する主要な港であったし、また *Periplus* の時代にはアンドラ王朝の最大の商業地であったことは疑いがないといっている⁶³⁾。

Periplus にはこれに続いて「此の地方(マサリアー地方——引用者)から東に向って其処の湾を横断するとデーサレーネーの地方があり、ポーサレーと呼ばれる象牙を産する」こと、次いで「航路が北に向って曲」っており、たくさんの未開種族が住んでおり、その中には食人種もいることが記されている⁶⁴⁾。この方面の記述はすこぶる漠然としたもので、とくに「東に向って」という部分は、正確には「北東に向かって」と書くべきであろうし、「其処から湾を横断すると」という部分の「湾」に該当するような、特記すべき湾も見当らない。村川堅太郎氏は、強いてあげれば Kistna 河口より南に Nizampatam 湾があるだけだと述べておられる⁶⁵⁾。

Periplus の作者はさらに記述を続け、「その次には東に向って(船を進め) ^{オーストラリア}大洋を右手にとり、左手には(印度の)残余の部分に沿うて外海を航行すると、ガンゲース及びその附近の、東の果の陸地たるクリューサーに着く。その辺にはやはりガンゲースと呼ばれる河があり、インドに於ける最大の河でネイロス河と同じやうに増水と減水とがある。其処には河と同名の商

商人共=市易。市易時鬼神不=自現=身。但出=宝物=題=其価直。商人則依=価置=直取=物。因=商人来往住。故諸国人聞=其土染=悉亦復来。於是遂成=大国。其国和適無=冬夏之異。草木常茂。田種随=人無=有=時節。(下略)』(『法顯伝』) この記事によって、セイロン島では珍しい珠玉類を産すること、そのため諸国の商人の来航するものも多く、一種の沈黙貿易が行なわれていたことがうかがわれる。なお上述の記事に見られる摩尼珠は、竜王の脳中にある清浄な玉であるという。もっともビールはこれは通常は真珠をさすと考えられているが、ここでは紅玉をさしていると推測しており、またジャイルズはここに述べられている摩尼珠は、真珠や紅玉ではなくて、単に仏教の数珠に用いる小玉をさしていると解している。(Samuel Beal, *Travels of Fah-hian and Sung-yung, Buddhist Pilgrims, from China to India*, tr. from the Chinese, 1869 [reprint, London, 1964], p. 148, n. 4; Herbert A. Giles, *Record of the Buddhistic Kingdoms*, 1877 [reprint, Vanarsi, 1972], p. 92, n. 8.)

61) *Periplus*, 61, 村川氏, 122-23頁。

62) *Periplus*, 62, 村川氏, 123頁。

63) Ptolemaios, VII, 1, 15; McCrindle, pp. 67-68; Schoff, p. 252; 村川氏, 240頁。

64) *Periplus*, 62, 村川氏, 123頁。なおデーサレーネー Dēsarenē については、プトレマイオスは Dōsarōn 河口をあげており、この川は今日の Mahānadi 川に比定されている。すなわちデーサレーネー地方は今日のオリッサ Orissa 地方に相当するものと考えられ、この地方で産する象牙は早くから著名であった。(Ptolemaios, VII, 1, 17; McCrindle, p. 71; Schoff, p. 253; 村川氏, 241頁。) また *Periplus* にはこの地方に住む未開の種族として、鼻がひしゃげて獐猛なキルラダイ Kirrhadai, 別の種族のバルギュソイ Bargysoi, 食人種のヒッピオプロソーポイ Hippiprosōphoi (「馬面族」という意味) があげられている。

65) 村川氏, 241頁。

業地ガンゲースがある」と書いている⁶⁶⁾。ここに述べられたガンゲース Gangēs は、ガンジスであると考えられるが、ここではこれが地方名、河川名、および商業地名の3様に用いられている。このうち地方名としてのガンゲースについては、ショッフはベンガル地方をさしていると言っている⁶⁷⁾。次に河川名としてのガンゲースについては、作者はネイロス Neilos, すなわちなイル川と同様に増水と減水があることを述べているが、これはガンジス川が定期的に増水・氾濫することを述べたものと解される。このことに関しては、プリニウスも「ある人々のいうところによれば、ガンジス川はナイル川と同様に未知の水源から発して、同じように附近の地方を灌漑する」と書いている。しかし、ガンジス川は河口地帯の変動が古来激しかったので、*Periplus* のガンゲース川が今日のどの川をさしているのかは明らかではない。作者はこの川の河口が1つであったと考えていたようであり、またストラボンもガンジス川がただ1つの河口をなして海に注ぐと書いているが、プトレマイオスは西から順に Kambyson, Mega, Kambērikhon, Pseudostomon, Antibolē の5つの河口をあげている。もっともこれらの5つの川の比定については、学者の間で意見がわかれており、たとえば第一にあげられた Kambyson 川をサン・マルタン Saint-Martin は今日の Hoochly 川に比定し、ユールは Mega 川をこれにあてている。またショッフは *Periplus* のガンゲース川をフーグリ川に比定している。今日フーグリ川はカルカッタを通過して Gangā-Sāgar 島の西方で海に注いでいるが、ショッフはかつてはこの島の東方で海に注いでおり、これがガンジス川の最大の河口をなしていたと推測している⁶⁸⁾。また商業地としてのガンゲースについては、*Periplus* にはさらに「此処を通過してマラバトゥロンとガンゲース産ナルドスと真珠とガ

ンゲース織と呼ばれる最優秀綿布とが運ばれる」と記されている⁶⁹⁾。ここはフーグリ川の河口に位置している Tāmpralīpti, すなわち今日の Tamluk (22°18'N., 87°56'E.) に比定されている。*Periplus* の書かれたころは、ここがこの方面の重要な商業地であり、海港であったことが、上述の記事によって知られるが、中世においてもここはベンガル湾の海港として、セイロン島や南海および中国方面との貿易によって繁栄したものと考えられる。法顕がセイロン島に渡航する時に船出した多摩利帝国、また唐の義浄(635-713)がインドへの往復に上陸および船出した耽摩立底国は、タムルークに比定されている。法顕はセイロン島に渡る前に、ここに2年間滞在して仏法の修業に励み、それから商船に乗り、冬のはじめの季節風を利用して14日間でセイロン島に到着している⁷⁰⁾。このの廃市は

69) *Periplus*, 63. 村川氏, 124頁。

70) Schoff, p. 255; 村川氏, 243頁。また『法顕伝』には次のように記されている。「従是(瞻波国をいう。ここはガンジス川の下流、今日の Bhāgalpur 地方に比定されている——引用者)東行近五十由延。到多摩利帝国。即是海口。其国有二十四僧伽藍。尽有僧住。法顕住此二年。写経及画像。於是戴商人大船。汎海西南行。得冬初信風。昼夜十四日到師子国。彼国人云。相去可七百由延。(下略)」この多摩利帝国の比定については、Beal, *op. cit.*, p. 147, n. 2; Giles, *op. cit.*, p. 91, n. 2; James Legge, *A Record of Buddhistic Kingdoms: Being an Account by the Chinese Monk Fā-hien of His Travels in India and Ceylon in Search of the Buddhist Books of Discipline*, Oxford, 1886 [reprint, New York, 1965], p. 100, n. 3; 足立喜六氏著『法顕伝』三省堂, 昭和11年, 225-26頁など参照。また義浄の『南海寄帰内法伝』巻第四には、かれの入竺の様子が次のように記されている。「遂以咸亨二年(671)十一月。附舶廣州。举帆南海。縁歴諸国。振錫西天。至咸亨四年二月八日。方達耽摩立底国。即東印度之海口也。」耽摩立底国の比定については、*A Record of the Buddhist Religion as Practised in India and the Malay Archipelago* (A. D. 671-695) by I-tsing, tr. by J. Takakusu, (以下 J. Takakusu) London, 1896 [reprint, Munshiram Manoharlal, 1966], p. 151, n. 1 & p. 185, n. 2 を参照。なお玄奘も『大唐西域記』巻第十に、耽摩栗底国の名で次のように書いている。「耽摩栗底国。周千四五百里。国大都城周十余里。滨近海垂。土地卑湿。稼穡时播。花菓茂盛。气候温暑。风俗躁烈。人性刚勇。邪正兼信。伽藍十余所。僧衆千余人。天祠五十余所。異道杂居。国滨海隅。水陸交会。奇珍异宝多聚此国。故其国人大抵殷富。(下略)」耽摩栗底国の比定については、高桑駒吉氏著、前掲書、5-9頁に詳細な記述がある。

66) *Periplus*, 63. 村川氏, 123-24頁。

67) Schoff, p. 255; 村川氏, 243頁。

68) Plinius, *N.H.*, VI, xxii, 65; Strabon, XV, 1, 13; Ptolemaios, VII, 1, 18; McCrindle, pp. 73-74; Schoff, p. 255; 村川氏, 243頁。

1940年からインド考古調査部によって発掘が行なわれ、多数の土器が発見された。その年代は明確ではないが、ここと中国やエジプトなどとの通商関係を示すものと考えられている⁷¹⁾。

次にガンゲースとならんで、「その附近の、東の果の陸地」であると書かれているクリューサーについては、*Periplus*にはさらに「此の河（ガンゲース——引用者）に対して大洋^{オーケアノス}の中に一つの島があるが、人の住む世界の東に向いた部分の果で、正に昇る朝日の下に位し、エリュトラー海の総ての場処の中で最もよい亀が居る」と記されている。クリューサーについては、1世紀のポンポニウス・メラも *Argyrē* の島とならんでクリューサーの島をあげており、前者には銀を、後者には金を産すると書いている。またプリニウスはセーレス *Seres* に関する記述の中で、かれらの地方に *Promunturium Chryse*、すなわちクリューサー半島があることを記している。さらに2世紀中葉のころのプトレマイオスは、すでに述べたように、コロマンデル沿海に「クリューサー行きの船の出発点」をあげているほか、ガンジス川以東の地域に関する記述の中で、*Chrysēs Chersonēsou* の沿岸地方をあげ、そこに *Takōla* および *Sabana* という2つの商業地や *Kōli* の町、そのほかいくつかの河口などを列挙している。かれが資料として利用したテュロスのマリノスの書には、マライ半島からさらにその東方の海域にいたるまで航海を行なったアレクサンドロスという西方世界の人物の報告が用いられており、そのためかれは1世紀のメラやプリニウスや *Periplus* の作者よりも、いっそう正確な記述を行なうことができたのである⁷²⁾。W. ヴィンセントはクリューサーを *Ava*, *Pegu*, または *シャム* であろう

と推定し、またマックリンドルはプトレマイオスの *Chrysēs Chersonesou* をイラワディ河口のデルタ地帯に比定したが、今日ではクリューサーは一般にマライ半島をさしていると考えられている。*chrysos* は「金」、*argyros* は「銀」、*chersonēsos* は「半島」を意味するギリシア語である。すなわち *Chrysē* の島、*Argyrē* の島は「黄金の島」、「銀の島」であり、*Chrysēs Chersonesou* は「黄金の半島」である。このような名称は、いわゆる「黄金郷」という架空の理想郷を思わせるものがあり、またマライ半島は決して産金国とはいえないが、この半島では *Kēlantan* から西部 *Pahang* および南部 *Nēgri Sēmbilan* を通ってマラッカまで金の鉱脈が延びており、ショッフはパハン州で古代の金の採掘の遺跡が発見されていることを指摘している。またウィートリーはマライ半島の多くの河川で砂金の採れることを指摘している⁷³⁾。

Periplus の作者は、クリューサーのかなたにさらにティス *This* という地方とティーナイ *Thinai* という大都市のあることを、次のように述べている。

「此の地方（クリューサー——引用者）の後に既に全く北に当って或る場処へと外海が尽きると、其処にはティーナイと呼ばれる内陸の大きな都があり⁷⁴⁾、此処からセーレスの羊毛と糸と織物とがバリユガザへとバクトウラを通じて陸路で運ばれ、又リミュリケーへとガンゲース河を通じて運ばれる。此のティスの地方へは容易には到達することが出来ない。と言ふのは此処からは稀に僅かの人たちが来るに過ぎないから。其処は小熊星の直下に位し、ポントス（黒海——引用者）とカスピアー海との最も遠隔の部分に境を接すると言はれる。カスピアー海の傍にはマイオーティス湖

71) 水谷真成氏訳『大唐西域記』中国古典文学大系、22、平凡社、昭和46年、318頁、注2による。

72) *Periplus*, 63, 村川氏, 124頁; ポンポニウス・メラの記述は, Paul Wheatley, *The Golden Khersonese: Studies in the Historical Geography of the Malay Peninsula before A.D. 1500*, Univ. of Malaya Press, 1961, pp. 127-29 の引用 (Frick 版, Leipzig, 1880) による; Plinius, *N.H.*, VI, xx, 55; Ptolemaios, VII, 2, 5 & I, 14, 1.

73) Vincent, Part II, p. 477; McCrindle, p. 198; P. Wheatley, *op. cit.*, p. 145, n. 2; Schoff, pp. 259-61; 村川氏, 245頁。

74) ここまでの部分は、ショッフの英訳では次のようになっている。"After this region under the very north, the sea outside ending in a land called This, there is a very great inland city called Thinae", (Schoff, p. 48.)

(アゾフ海——引用者)が横たはり ^{オーケアノス} 大洋 に注いで居る。⁷⁵⁾

ここに述べられているティスの地方は中国を、またティーナイはその首都をさしているとして一般に考えられており、ショッフは後者を長安に比定している⁷⁶⁾。またプトレマイオスは地方名として Sinai を、またその首都として Sinai または Thīnai をあげているが、これらはティス、ティーナイと同じ系統に属するものと考えられている。かれは地方名としての Sinai について、北は Sērīkē と境し、東と南は未知の地に、西はガンジスのかなたでインドと境していると述べ、また首都の Sinai または Thīnai については、真鍮の壁もなければ注目に値するなにもない⁷⁷⁾。これらも中国とその首都をさしていると考えられる。古典古代の西方世界では、Ⅷで述べたように、中国もしくはアジア東方の奥地を Sēres の名で呼んだが⁷⁸⁾、上述のティス、ティーナイ、シナイはやはり中国や中国の首都をさした名称と考えられているのである。ただし、Sēres がウラル・アルタイ系の民族の「絹」を意味する語に由来し、陸路によって西方世界に伝わったのに対して、ティス、ティーナイ、シナイは海路によって伝わったものと考えられている。またその語源としては、リヒトホーフエンは漢がベトナムの順化(ユエ)附近に設けた日南郡の日南(Jih nan)に由来するとし、ラクーペリーは中国の雲南省の中部および西部にあったとされている滇(Tien)国に由来すると説いたが、今日一般に認められているところでは、前221年に中国に統一国家を樹立した秦(Ts'in)の称号に由来するとされている。ユールはこれがマライ人を通じて西方へ伝わったといっている。また石田幹之助博士は広東附近を中心とする南方海上交通の進展に依拠して、この語がインドシナまたはマライ諸島から南インドに達したことが想定されるが、他

方陸路を通してインド方面に伝わったことも考えられるとされ、さらにそれがインドとの海上貿易に従事していた西方世界の商人や船乗によって西方に伝えられたと説いておられる⁷⁹⁾。いずれにしても、ティス、ティーナイに関する記述を行なったのは *Periplus* が最初であり、この書の作者はおそらくインドの船乗または商人からこれらについて伝聞したものと考えられる。これらの呼称が海上交通を通してインド方面へ伝わったものとすれば、この書の書かれた1世紀の後半には、インド以東の海上貿易もすでにある程度の発達をしていたものと推測される。

これまで *Periplus* の記述を中心として、インド南部の東西の沿岸から、セイロン島やインド北東部沿岸、さらにそれ以東の地方の状況について、とくに商業地に重点をおいて考察してみた。これによって、*Periplus* の書かれた1世紀の後半には、この方面の海域ではかなり活発な海上交通や通商が行なわれていたことが推測され、さらにマライ半島方面やそれ以東の地域との間にも、ある程度の船舶の往来のあったことを想定することができよう。

しかし、*Periplus* の記述はリミュリケー地方、すなわちマラバール沿岸のチェーラ王国およびパーンディヤ王国北部の、ネルキュンダおよびバカレーまでの状況については、かなり正確かつ詳細であるが⁸⁰⁾、インド半島南端に近づくに

79) Colonel Sir Henry Yule, *Cathay and the Way Thither: Being a Collection of Medieval Notices of China*, Revised by Henri Cordier, Vol. I, Hakluyt Society, 1915 [reprint, Peking, 1942], pp. 1-5. (東亜史研究会訳編『東西交渉史——支那及び支那への道——』帝国書院, 昭和19年, 1-6頁); 石田幹之助氏著『歐人の支那研究』, 日本図書, 昭和21年, 20-24頁。

80) *Periplus* の作者はとくに テュンディス——ムージリス間、およびムージリス——ネルキュンダ間の距離を記しており、またネルキュンダおよびバカレーのあたりの海域で陸に近づいたしるしとして、蛇(海蛇)が出迎えるにくることに言及して、これらの蛇が「皮膚は黒いが短く短く頭は竜の如く目は血のように赤い」(*Periplus*, 55, 村川氏, 118頁)とすこぶるヴィヴィッドな叙述を行なっている。このような記述は、作者がこの辺の海域をよく知っており、航海の経験のあったことを物語ってくれるものといつてよからう。

75) *Periplus*, 64, 村川氏, 124-25頁。

76) Schoff, p. 261.

77) Ptolemaios, VII, 3, 1 & 6.

78) 本稿(5), 35-36頁参照。

つれて、その叙述はしだいに漠然となり、とくに最南端をなしているコモリン岬の南方にまで陸地が延びているとの誤った記述を行なっている。また西海岸の状況については、マンナル湾あたりの叙述は真珠の産地であるだけに、やや詳細になるが、その北方のカマラ以下の3つの商業地については、「比較的著名な商業地」として、それらの名称を列挙しているだけにすぎない。またセイロン島に関する作者の地理的観念にも、大きな誤りが認められる。さらにマサリアー地方からその北方のガンジス河口地帯、その東方のクリューセーやティスの地方の記述は、いっそう漠然としたものになってくる。このような *Periplus* の叙述から判断すると、作者が実際に航行してよく知っていた地域は、当時パーンディヤ王国に属していたネルキュンダおよびバカレーまでであり、それより南方のピュルロン山やパラリアーと呼ばれる地方あたりからさきは、作者はおそらく航海の経験はなく、土地の船乗か商人からの伝聞によって書いたのではなかろうかと推定される。ショッフはピュルロン山、すなわち「赤い涯」と呼ばれる Varkallai や Anjengo あたりまでが作者の実際に航行したところで、それより南方へは航行しなかったと推定しているが⁸¹⁾、この方面に関する記述は、ネルキュンダやバカレーまでの記述と比較すると、かなり漠然としたものとなっており、作者の航跡の範囲はやはりネルキュンダおよびバカレーまでと考える方が、合理的であろうと思われる。村川堅太郎氏は「凡そBakareから先には作者は赴いて居らぬと断じて差支えない。海岸の地勢や、一港から他港への日程や距離を述べて居ないことだけでも之を証するに充分である」と述べておられる⁸²⁾。

他方、この書の記述のし方を見ると、ネルキュンダおよびバカレーに関する記述のあとで、

81) Schoff, p. 234. またウォーミントンはネルキュンダかも知しくは「赤い涯」より南へは航海を行なわなかったろうと推定している。(E.H. Warmington, *The Commerce between the Roman Empire and India*, Cambridge, 1927 [以下 Warmington], pp. 59-60.

82) 村川氏, 43頁.

作者はリミュリケー沿岸の商業地の輸出入品についての記述を行ない、次にヒッパロスの風を利用するインドへの航路について述べている。そしてそのあとで再びピュルロン山以下の沿岸の記述に移っている。このような記述のし方を見ると、作者はネルキュンダおよびバカレーまでの沿岸とそれより南方の沿岸とを区別して考えていたように思われる。以上に述べたところから考えると、*Periplus* の作者ばかりでなく、一般に西方世界の商人が貿易のために来航した南インドの商業地も、ナウーラからネルキュンダおよびバカレーまでであったと考えて差支えないように思われる。ストラボンは「エジプトからナイル川およびアラビア湾(紅海——引用者)によって遠くインドまで航行する商人たちについては、ごく少数のものだけがガンジスまで航海する」と書いているから⁸³⁾、商人の中にはコモリン岬をまわってコロマンデル沿海をガンジス河口までおもむくものもあったかも知れないが、それはむしろ例外的であって、西方世界の商人が定期的に航行したのは、ネルキュンダやバカレーまでであったと考えてさしつかえなかろう⁸⁴⁾。

ところで *Periplus* には、すでに述べたように、リミュリケー地方の沿岸と東海岸南部方面との間には、土着民による船舶の往来があったことが記されている。また東海岸南部とガンジス河口やクリューセー方面との間にも、大型船による航行が行なわれていたことが、述べられている。したがって、これらの方面の産物は、土着の船舶によってリミュリケー地方の商業地へ運ばれたものと考えられる。しかし、南インドでは当時は陸路によって東西両岸間の交通も行なわれていたようである。ウォーミントンは Achenkoil 峠を通して、バカレーに比定された

83) Strabon, XV, 1, 4.

84) バンバリーは、*Periplus* のころギリシア商人が定期的に訪問したもっとも遠隔の地点がネルキュンダであったことは、明らかであるといっている。(E.H. Bunbury, *A History of Ancient Geography among the Greeks and Romans from the Earliest Ages till the Fall of the Roman Empire*, 2nd. ed., 1883 [reprint, Dover Publications, 1959], Vol. II, p. 472.

Porakad から東海岸にいたる公道のあったことを推定している。またウィーラーはコインバトル地方は、東海岸からは Cauvery 溪谷、西海岸からは Ponnani 溪谷を通して達することができるが、そこでは東ゴーツ山脈が西方にまわりこんで、西ゴーツ山脈にせまっておき、両山脈の間には幅20マイル（約32キロ）、高さはわずか1,000フィート（約300メートル）の横断河谷があり、現在はこの河谷を通して鉄道がマドラスおよび Carnatic 平原からカリカットおよびコチンに通じており、かつてはここを通して東西の兩岸を結ぶ陸路が走っていたものと推定している。さらにかれはこの附近が西方世界で需要する緑色エメラルドの産地であり、また紀元1世紀のローマの貨幣が多数このあたりで発見されていることを指摘して、この公道がマラバールおよびコロマンデル両海岸の諸港間を結ぶ長い沿岸航海にかわる有益な通路であったと推定している⁸⁵⁾。いずれにしても、コモリン岬の回航は当時においては相当に危険であったものと考えられ、西方世界の商人はこれを避けて、リミュリケー地方の沿岸商業地で内地の産物や東海岸やマライ半島方面から送られてくる産物を求めるか、あるいはここから陸路によって内地の胡椒や貴石類の産地におもむき、また東海岸の商業地へもおもむいたものと考えられる。かれらがコモリン岬を回航して、東海岸の商業地やさらにそれ以東の方面まで進出するようになるのは、おそらく1世紀の末か2世紀に入ってからのことと考えられる。1世紀後半の *Periplus* の記述と2世紀中葉ごろのプトレマイオスの記述とを比較すると、コロマンデル沿岸に関しては後者の方がはるかに正確であり、あげられている商業地の数も多い。クリューセー方面の記事に関しても、同様のことがいえる。このことは、1世紀末または2世紀に入ってから、西方世界の商人のこの方面への進出によるところが大きかったものと思われる。これを要するに、*Periplus* のころは、西方世界の商人がもっ

ばら来航した南インドの商業地は、ネルキュンダおよびバカレーを南限としたものといつてよからう。

いま *Periplus* に記された商業地や停泊地を、西方世界の商人の来航地とそれ以外のものにおいて整理すると、第1、2表の通りである。

輸出品

Periplus には第1表にあげたりミュリケー地方の商業地の輸出入品についての記載がある。そのうち輸出品と考えられるものは、次の通りである。

多量の胡椒とマラバトウロン malabathron, 多量の優秀な真珠, 象牙, 絹織物, ガンゲース産のナルドス nardos, さまざまの透明石, 金剛石, ヒュアキントス hyakinthos, クリュソネーソス産の亀やリミュリケー地方の前面の島々で捕えられる亀⁸⁶⁾。

以上のほか、この書にはこれらの輸出品やそのほかのものの産地や輸送経路等についての記載も見られる。それらを列挙すれば、次の通りである。

コマレイからコルコイまでの地帯——真珠の採取場⁸⁷⁾。

エーピオドーロスの島——真珠, これはアルガルーだけで買うことができる⁸⁷⁾。

アルガルー——アルガルー織と呼ばれる上質綿布⁸⁷⁾。

パライシムンドウーの島——真珠, 透明な石, 上質綿布, 亀甲⁸⁸⁾。

デーサレーネーの地方——ボーサレーと呼ばれる象牙⁸⁹⁾。

ガンゲース（商業地）——ここを通して運ばれるマラバトウロンとガンゲース産ナルドスと真珠とガンゲース織と呼ばれる最優秀綿布⁹⁰⁾, ほかにセーレスの羊毛と糸と織物が、ここを通してリミュリケーへ運ばれる⁹¹⁾。

85) Warmington, p. 59; Wheeler, Arikamedu, p. 116; ditto, *Rome*, p. 143 (糸賀氏訳, 168頁.)

86) *Periplus*, 56, 村川氏, 118-19頁.

87) *Periplus*, 59, 村川氏, 121頁.

88) *Periplus*, 61, 村川氏, 122-23頁.

89) *Periplus*, 62, 村川氏, 123頁.

90) *Periplus*, 63, 村川氏, 124頁.

第1表 リミュリケー地方の西方商人来航地

Periplus の商業地・ 停泊地	所 属 国	現代の推定地	備 考
ナ ウ ー ラ	チェーラ王国	カンナノール	リミュリケー第一の商業地
テ ユ ン デ ィ ス	〃	ボンナーニ	リミュリケー第一の商業地、海に臨んだ著名な村
ム ー ジ リ ス	〃	クランガノール	現在繁栄している。テュンディスから500スタディオ ン、河口から20スタディオ
ネ ル キ ユ ン ダ	パーンディヤ王国	コ ッ タ ヤ ム	ムージリスから500スタディオ、海から120スタ ディオ
パ カ レ ー	〃	ポ ラ カ ー ド	海に臨んだ村、ネルキュンダ出航の船の積荷地

第2表 西方商人来航地以外の商業地等

Periplus の商業地・ 停泊地	所 属 国	現代の推定地	備 考
バ リ タ	パーンディヤ王国	ヴァルカライあたり	よい停泊地、海に臨んだ村
コ マ レ イ	〃	コモリン岬	番所と港あり
コ ル コ イ	〃	コ ル カ イ	附近に真珠採取場あり
カ マ ラ	チェーラ王国	カーヴェーリーパッ タム(ブカル)	リミュリケーや北方から航海してくる人たちの上 陸する停泊地の中で比較的著名な商業地
ポ ド ウ ー ケ ー	〃	アリカメドゥ(ボン ディチェリー)	
ソ ー パ ト ャ マ	〃	マ ド ラ ス (?)	
ガ ン ゲ ー ス	〃	タ ル ム ク	

クリューセーという島——エリュトゥラー海
のすべての場所のうち、もっともよい亀⁹¹⁾。

ティスの境——ベサタイ Besatai 人がもた
らす大丸・中丸・小丸の3種類のマラバト
ウロン⁹²⁾。

以上のうち、綿布だけはリミュリケー地方の商
業地の輸出品の中にあげられていない。またこ
れらの輸出品や産物のうち、西北インドのバル
バリコンおよびバリュガザの輸出品のうちにあ
げられているもの、もしくは同類のものは、象
牙、ナルドス、セーレスの糸や織物、すなわち
生糸および絹布、ならびに綿布類だけである。
このことは、西北インドの商業地とリミュリケ
ー地方の商業地とで、輸出品に著しい相違のあ
ったことを示すものといってよい。次にこれらの
輸出品や産物について検討を加えてみたい。

リミュリケー地方の商業地の輸出品として最

初にあげられているのは、多量の胡椒とマラバ
トゥロンであり、*Periplus* にはそのためにこの
方面へは「大型の船が航海する」と記されてい
る。このような大型船の航海は、ソマリーラン
ドの肉桂の輸出港であるモスュルロン Mosyl-
lon の場合にも見られたのであって、後者の場
合には「普通のより大型の船を必要とする」と
記されている⁹⁴⁾。いずれにしても、西方世界へ
はすこぶる大量の肉桂や胡椒が当時輸入された
ために、とくに大型の船舶がこれらの商業地へ
送られたものと考えられる。*Periplus* にはまた
南インドの胡椒の産地として、とくにコッタナ
リケー Kottanarikē という地名があげられ、
ここ一カ所だけで多量に産する胡椒がリミュリ
ケーの商業地に運ばれてくることが記されてい
る。またプリニウスは南インドの胡椒産地とし
てコットナラ Cottonara という地名をあげ、こ
こから割り舟で Becare すなわちバカレーまで

91) *Periplus*, 64, 村川氏, 124-25頁.

92) *Periplus*, 63, 村川氏, 124頁.

93) *Periplus*, 65, 村川氏, 125-26頁.

94) *Periplus*, 56 & 10, 村川氏, 118頁および84頁.

胡椒が運び出されることを書いている⁹⁵⁾。コッタナリケーとコットナラはおそらく同じ場所をさしていると考えられるが、これが今日のどこに当るかは、明らかではない。ショッフはこのことに関する諸説を紹介しているが、それによれば、Burnell はこの語は Kolatta-nādū に由来するもので、これを北部マラバール地方に比定しており、また Buchanan は Kadatta-nādū に由来するものと考えて、これをカリカット周辺の南部マラバール地方に比定している。そのほかショッフはコールドウェルや Menon の所説を紹介しているが、その正確な位置はわからないと述べている。またラッセンはこの名称は胡椒産地の Kadutināḍa に由来するもので、これが Kadutinara と発音されたことから、このようなギリシア名が生じたものと推定している。村川堅太郎氏はラッセンの所説を紹介しながら、原名も場所の比定も確実ではないが、これがマラバール海岸のある地帯であることは明らかだと述べておられる⁹⁶⁾。このようにコッタナリケーおよびコットナラの比定については、今日まで定説はないが、そこからバカレーまで割り舟で胡椒が送られてくるとのプリニウスの記述からすれば、コッタナリケー、コットナラがバカレーからそれほど遠くない、リミュリケー地方のどこかに位置しているということができよう。

胡椒は学名を *Piper nigrum*, Linn. という、通常は雌雄異体の多年生登攀植物で、トラヴァンコールやマラバール地方の森林に自生しており、また南インドの熱い湿潤な地方で栽培され、そのほかベンガル、アッサム、ボンベール、マドラスなど、インドの諸所で栽培され、スマトラ、タイ、マライ半島などでも古くから栽培されていたが、長い間マラバール地方の胡椒が最上のものとされてきた。*Periplus* やプリニウスの記述は、当時このマラバール地方の胡椒が、大量に西方世界へ輸出されたことを物語ってくれる

わけである。中世になっても、マラバール地方の胡椒は西方世界によく知られていたのであって、たとえば6世紀のコスマス Kosmas Indikopleustes は「胡椒の生えている Malē (マラバール——引用者)」とか「胡椒を輸出する Malē の5つの商業地」ということを書いており、また13世紀のマルコ・ポーロやかれのあとでインドを通して海路元代の中国におもむいたフランシスコ派の宣教師オドリコ Odorico de Pordenone (1286~1331) も、当時マラバール地方が胡椒の重要な産地であったことを書いている⁹⁷⁾。

商品としての胡椒には黒胡椒と白胡椒の2種類があるが⁹⁸⁾、どちらも *Piper nigrum* の実からえられる。この植物の実のはほぼ円形の粒状をなしており、はじめは緑色であるが、熟すると赤くなる。実の赤い皮の下には薄い果肉の層があり、それが白い粒子を包んでいる。この実の成熟一步手前のものをとり、乾燥させたものが黒胡椒で、その名前の通り黒色を呈している。また熟した実の果皮と粒子をとりまく上皮をとりさったのが白胡椒で、この方は表皮が滑かで、白色に近い色を呈している⁹⁹⁾。

97) Sir George Watt, *The Commercial Products of India: Being an Abridgement of "The Dictionary of the Economic Products of India,"* London, 1908 [reprint, New Delhi, 1966] (以下 Watt), pp. 896 ff.; Kosmas, Book III & XI (*The Christian Topography of Cosmas, an Egyptian Monk*, tr. by J. W. McCrindle, The Hakluyt Society [reprint, New York], pp. 119, 366, & 367.). マルコ・ポーロは Melibar 王国、すなわちマラバール地方で大量の胡椒、しょうが、シンナモン(肉桂)などを産すると書いている。(Book III, xxx. Yule, *Marco Polo*, Vol. II, p. 389.) またオドリコは Minibar, すなわちマラバール地方の森に胡椒の木が生えており、その森は18日行程にもわたってひろがっていると述べ、さらに胡椒の採取について詳細に記している。(Yule, *Cathay*, Vol. II, *Odoric of Pordenone*, pp. 132-37; オドリコ著、家入敏光氏訳『東洋旅行記』[東西交渉旅行記全集, II], 桃源社, 昭和41年, 72-73頁.)

98) このほかに主としてインドの北部に産する長胡椒があり、プリニウスはこれが同じ植物からえられるもので、ただ製法が異なっているだけだと書いているが、これは *Piper longum* という別の植物からえられるもので、バリユガザから輸出されたことは、すでに述べた通りである。(本稿[5], 43頁参照.)

99) J. Innes Miller, *The Spice Trade of the Roman Empire*, Oxford, 1969, pp. 80-81; 山田憲太郎氏「ローマ人とインドの胡椒」(『名古屋学院大学論集』Vol. 8, 7)

95) *Periplus*, 56, 村川氏, 119頁; Plinius, *N. H.*, VI, xxvi, 105.

96) Schoff, pp. 221-22; Lassen, III, S. 34; 村川氏, 230頁.

今日胡椒は主として香辛料として用いられるが、インドでは早くから薬剤として用いられていた。古代インドの薬物書である『チャールカ』や『スシュルータ』には、鎮痛の緩和、腸の痛みどめと粘液の吸収、肥満の防止、鼻カタル、せきどめと解熱の効用があげられ、また消化を助け、食欲の増進に効果があり、強精剤としても用いられることが記されているという¹⁰⁰⁾。西方世界でもはじめは薬剤として用いられたことが、ヒポクラテスの医書やテオプラストスの著作からうかがわれる¹⁰¹⁾。しかし、かれらは胡椒に黒、白の2種類のあることは知らなかったようであるし、またどこからもたらされるのかも知らなかったようである。そしてそれ以後のヘレニズム時代の古典作家の著作には、胡椒の記述は見られないようである。ようやく前1世紀末のウィトルーウィウスにいたって、胡椒の簡単な記述に出あうが、かれは胡椒をシリアかアラビアの産物であると考えていたようである¹⁰²⁾。もっともプルタルコスやスラ Lucius

C. Sulla (前138-78) のアテナイ 包囲 (前88年) に関する記述の中で、そのころアテナイの小麦の価額が暴騰して、市民が食糧に困っていたとき、市民の困窮をかえりみず、ぜい沢三昧にふけていた独裁者 アリスティオン Aristion のもとへ、ある女祭司が小麦半ヘクテウス hek-teus (約1 ガロン) をもらいにいったところ、かれは小麦のかわりにそれだけの量の胡椒を与えたということを書いている¹⁰³⁾。これは飢えている女祭司にとってはなんの役にもたたなかったであろうが、独裁者のアリスティオンにとっては、この程度の胡椒なら、哀れな女祭司に対するいたずらに使うのはなんでもないことであつたということを物語ってくれるものであり、当時はすでにある程度の胡椒がアテナイに送られてきており、しかも薬剤ではなく、おそらく香辛料として用いられていたことを思わせるものがある。すなわち当時はようやく西方世界の上層のものが、胡椒を香辛料として用いるようになったことが推測されるのであるが、しかしまだそれほどポピュラーになってはいなかったことが、上述のウィトルーウィウスの記事から推察されるのである。ターンは相当量の胡椒がインドから西方世界へ送られるようになってきたのは、前120~前88年の間のことであつたろうと推定し、それはおそらくセレウキアを経てシリア方面へもたらされたのであり、ローマ人が胡椒をはじめて知ったのは、前64年に北シリアを併合してからのことであろうが、その後もかれらはしばらくはそれがシリアかアラビアから送られてくるものと考えていたと述べている¹⁰⁴⁾。

このように胡椒は比較的遅くなって西方世界

へや蘭やあらゆる草に香があつたり、香気の強い木があつたり、胡椒に円い実があつたり、没薬の木に球状の実があつたり、……」(森田慶一氏訳『建築書』生活社、昭和18年、290-91頁。)

103) Plutarchos, Sulla, 13. (河野与一氏訳『プルターク 英雄伝』[岩波文庫] (6), 176頁。)

104) W.W. Tarn, *The Greeks in Bactria and India*, Cambridge, 2nd ed., 1951, p. 371. またウォーミングトン はローマ人がはじめて胡椒を知ったのは、かれらが小アジアおよびシリアを征服してからのことであつたろうと推定している。(Warmington, p. 181.)

\\No. 4, 103頁。)

100) 山田憲太郎氏、前掲論文、104頁による。インドでは中世になっても胡椒が薬剤として用いられたことが、入竺僧義浄の『南海寄帰内法伝』巻第三に、寒気を覚えたときは、「菹豆湯」に「椒・薑・華菱」を投じたものを飲むと記されていることから、うかがわれる。菹豆は扁豆、椒は胡椒、薑はしょうが、華菱は長胡椒である。高楠順次郎博士の英訳では、この部分は次のようになっている。「If we feel chilly the last-named water (i.e. lentil water) is to be drunk with some pepper, ginger, or the Piper longum (Pippali).」(J. Takakusu, p. 135.)

101) ヒポクラテスはある婦人の病気に、蜂蜜および酢に胡椒を混ぜたものを勧め、また四日熱に用いる薬剤として、月桂樹、テンニンカ、ウミダヌキ香、カシヤ、没薬などに胡椒を混ぜたものをあげている。(Hippokrates, ed. Littré, VIII, 207, 395, & 654.—Miller, *op. cit.*, p. 82 による。) またテオプラストスは胡椒は果実で2種類あり、一方は果実がカラスノエンドウのように円く、月桂樹の漿果のように外皮と果肉があつて、色は赤みがかっており、他方は細長くて黒く、ケシのような種子があると書いたあとで、その効用として毒ニンジン の下毒剤として用いられることを書いている。(Theophrastus, *Inquiry into Plants*, IX, xx, 1.) なお山田憲太郎氏はテオプラストスの2種類の胡椒について、一方は普通の胡椒、他方は長胡椒をさしているようにも思われるが、はっきりしないふしもあると書いておられる。(山田氏、前掲論文、106頁。)

102) Vitruvius, *De Architectura*, VIII, 3, 12. かれは次のように書いている。「……スュリアとアラビアには葦

に知られるようになったと考えられるのであるが、ローマ帝国時代を迎えて奢侈の風潮が広まるにつれて、香辛料としての胡椒の需要が急速に高まると、商人たちは大型の船舶で直接マラバール沿岸の商業地におもむいて、盛んに胡椒を買いつけるようになった。さきにあげた *Periplus* の記述は、このことを雄弁に物語ってくれるが、タミールの詩人も「袋につめた胡椒を家から市場に運んでゆく。売った品物と交換に船から受けとった黄金を、はしけで Muchiris (ムージリス)の岸边にもってゆく」とうたっている¹⁰⁵⁾。この詩にはどこの船から黄金を受けとったとも書かれていないが、おそらく西方世界の商人のもたらしたデーナーリウス金貨と胡椒との交換を描写したものと考えてさしつかえなからう。このような胡椒貿易の発達には、胡椒に関する西方世界の知識を豊かにしたことはいうまでもない。プリニウスは胡椒について次のように書いている。

「胡椒のなる木はわが国の杜松に似ており、いたるところ(インドの——引用者)にある。(中略)その種子は杜松のものとは異なって、いんげん豆の場合に見られるように、小さなさやに入っている。これらのさやが開かない前にもぎとり、日にほすと、長胡椒と呼ばれるものができる。しかし、徐々に開くままにしておくと、熟して白胡椒が現われる。のちにそれを日にほすと、色が変わってしわがよる。(中略)黒胡椒はもっとも味がよいが、白胡椒は黒胡椒や長胡椒より香りがおだやかである¹⁰⁶⁾。」

この記述はかなり不正確かつ誤りがあり、胡椒の木が(インドの)いたるところにあるとか、長胡椒も同じ木からできるものだとか書かれており、作者の知らない遠い異国の植物の知識がいかに不正確に伝わるかを示してくれるものではあるが、その反面、製品については黒・白の胡椒を明確に区別し、黒が刺激性が強く、白

の方がおだやかであり、また刺激性の強い前者の方が好んで用いられるというような、それ以前の記事には見られない記述がなされている。この記事によって、当時の西方世界ではすでに胡椒が香辛料として盛んに食卓にのぼっていたことがうかがわれるのであり、このことはさらにかれが次のように書いていることから、明確に知ることができる。

「胡椒の使用がかくも多大の人気を博していることは、驚くべきことである。ある食品の場合には甘味が人をひきつけ、また他の食品の場合には外見が人をひきつけるものだが、胡椒は果実にしても、乾燥した種子にしても、なにも人に訴えるところはない。ただ1つの好ましい点は、刺激性ということであるが、しかもわれわれはそれをとりにほるばるインドまで出かけてゆくのだ。自分の食物に進んでこれを試みた最初の人、単に空腹を満たすだけでなく、食欲に対するあくことのない食欲さで、これを試みた最初の人、いったい誰だったのだろう。胡椒としょうがはかれら(インド人——引用者)の国に自生している。それなのに金や銀と同じ値で売られるのだ¹⁰⁷⁾。」

帝制樹立いらい、急速に高まってきた食卓のぜい沢さに、おそらく慨嘆の念を禁じえないで、プリニウスは以上のように書いているのであるが、当時の富裕な上層階級の人々は、食卓の豪華さを競うとともに、その食欲増進のために胡椒を香辛料として盛んに用いたのであり、とくに刺激性の強い黒胡椒が好まれたのである。もっとも白胡椒の製造には、原料果実の38~40%の減耗と1カ月の日時を要するとのことで¹⁰⁸⁾、そのため価額はローマにおいても白胡椒の方が高く、プリニウスによれば、1ポンドにつき黒胡椒4デーナーリウスに対して、白胡椒は7デーナーリウスであった¹⁰⁹⁾。

このようにローマ帝国時代に入ると、胡椒は香辛料として原産地のマラバール沿岸の商業地

107) *Ibid.*, XII, xiv, 29.

108) 山田憲太郎氏, 前掲論文, 103頁.

109) Plinius, *N.H.*, XII, xiv, 28. なお長胡椒は1ポンド15デーナーリウスであった.

105) Oaranar-Puram, 343 (Mookerji, p. 94の引用による.)

106) Plinius, *N.H.*, XII, xiv, 26-27.

から、直接大量に輸入されるようになり、これが南インドの西方世界向けの輸出品のうちで、もっとも重要なものとなったのである。そしてその使用はやがて広く帝国の各地にひろまったらしく、食卓で用いる銀製の胡椒いれの壺 (*piperatoria*) が Chaource, Cahors, その他で発見されており、そのほかフランスの Arles-Trinquetaille, Saintes, および Saint-Maur-de-Glanfeuil, イタリアのポンペイおよび Corfinium, シシリー島の Murmuro などでも胡椒いれの壺が発見されている¹¹⁰⁾。他方、従来からの薬剤としての使用も依然として見られたのであって、薬物を扱った Galen, Celsus, Scribonius らの著作に、その使用が記されており、とくにおこりや解熱に効果があるとされていたようである¹¹¹⁾。

胡椒とならんで、リミュリケー地方の商業地から大量に輸出されたものが、マラバトゥロンである。W. ヴィンセントはこれをキンマ (*betel*) と推定したが、ラッセンはこの語はサンスクリットの *tamālapatra* の音訳であるとしている。かれによれば、*tamāla* はある種の肉桂をさす語であり、*patra* は葉を意味している。したがってマラバトゥロンはある種の肉桂の葉をさしている¹¹²⁾。*Periplus* にはこれがインドの内地に産すると記され、また別のところでは、後述するように、ティスの境にベーサタイ *Bēsatai* と呼ばれる未開の種族がこれを持ってくることが記されている¹¹³⁾。ショッフやウォーミントンは、南インドから輸出されたマラバトゥロンは、*Cinnamomum iners* および多分 *C. zeylanicum* であり、またヒマラヤ山中に産する *C. tamala* であつたろうと考えており、また山田憲太郎氏は北部のヒマラヤ山系に多い *Cassia Lignea* をさしているものと推定しておられる¹¹⁴⁾。ワットによれば、*C. iners* はビルマの最

南端の Tenasserim 地方やマライ半島に産する大きな樹木であり、*C. zeylanicum* は西および南インド、Tenasserim, 地方、およびセイロン島に産し、Konkan から以南の西および南インドでは、標高6,000フィート (1,800メートル) までのゴーツ山脈の斜面に多数自生している。また *C. tamala* は山田憲太郎氏の推定しておられる *Cassia Lignea* のことで、これはヒマラヤ山中に自生する中程度の大きさの常緑樹で、インダス川および Sultej 川あたりでは稀であるが、それより東方では東ベンガル、アッサムの Khasia 山中、およびビルマなどで、標高3,000~7,000フィート (900~2,100メートル) のあたりに多数見られる。ワットはさらにこの植物の葉は長い間インドの輸出の対象となってきたもので、葉の方が樹皮よりも重要であり、Adam, その他の人々がギリシア人やローマ人のマラバトゥロンをこれに比定していることを指摘している¹¹⁵⁾。

肉桂についてはすでにVIで詳細に述べ、とくにインド以東に産するこの香料が、古代においてはアフリカのソマリーランド沿岸の商業地から輸出されるという、すこぶる奇妙な現象についても検討を加えたが¹¹⁶⁾、同じく肉桂でもマラバトゥロンはリミュリケー地方の商業地から輸出されたのであって、古代の西方世界の人々は、これがソマリーランドの商業地から輸出される、かれらの珍重する肉桂と同じ種類のものだということを知らなかったのである。プリニウスは *malobathrum* はシリアに産し、葉は折り重なっていて、それから香油用の油がとれること、エジプトでもこれを多量に産すること、しかしインド産のものの方が高く評価され、この方は湿地に生えているといわれ、香りはサフランより強いこと、*malobathrum* を舌にのせると、ナルドスのような味がし、これをちょっと暖めたブドウ酒に加えると、その香りはなにものにも優ること、その価額は驚くべきもので、

「シリア」(『名古屋学院大学論集』Vol. 8, No. 1), 140頁。

115) Watt, pp. 310-13.

116) 本稿(3), 60頁以下参照。

110) Warmington, pp. 183-84.

111) *Ibid.*, p. 182.

112) W. Vincent, Part II, p. 419; Lassen, I, S. 332 & III, S. 37; McCrindle, p. 220; 村川氏, 228-29頁。

113) *Periplus*, 56, & 65, 村川氏, 119頁および125頁。

114) Schoff, pp. 216-17; Warmington, p. 190; 山田憲太郎氏「聖書香料植物考(その2)——シンナモンとカッ

1ポンドにつき1デナーリウスから400デナーリウスまでさまざまであるが、葉自体は1ポンド60デナーリウスであること、などを記している。この記事によって、マラバトゥロンがナルドスと同様に香油の原料として用いられ、すこぶる高価なものであったことがうかがわれる。またプリニウスはこれがインドに産することを知っていたが、シリアやエジプトにも産すると考えていたことが、上述の記事からうかがわれる。このことについて山田憲太郎氏は、当時シリアやエジプトのアレクサンドリアなどでインドからもたらされた葉を偽和加工し、あるいは油を製造していたことによるものであらうとされている。プリニウスはまた別のところで、マラバトゥロンの薬剤としての効用について書いているが、それによればそれは利尿剤として効果があり、またブドウ酒にに入れて煮ると眼病によく効き、そのほか睡眠剤にも用いられ、この葉を口にすれば、口中や呼吸をさわやかにし、衣服の中にいれれば快い香りを発することなど、さまざまに用いられたことを伝えている¹¹⁷⁾。

ところでマラバトゥロンは、さきほども述べたように、はるか遠隔のティスの境から送られてきたことが、*Periplus*に次のように記されている。

「毎年ティスの境には体が矮小で顔幅が恐ろしく広く、……の一種族がやって来る。(噂によると) 彼等はベーサタイと呼ばれ、未開人に殆ど同じださうである。彼等は女や子供を伴ひ、大きな荷物即ち葡萄の若葉を容れた籠に似たものを運んでやって来て、それから彼等とティスの人々との境界の或る処に留まり、籠を敷き延べてその上で数日間お祭り騒ぎをした後もっと奥地の自分の故郷へと出発する。人々はそれを見張って居て此の時其処にやって来て彼等の下敷きを集め、ペトゥロイ¹¹⁸⁾と呼ばれる蘆の葉肋を引き抜き、〔ベー

サタイの持って来た〕葉を薄く重ねて丸くして蘆の葉肋で指し通す。これに三種があり、大型の葉からは大丸マラバトゥロンと呼ばれるものが、これより劣った葉からは中丸が、更に小さな葉からは小丸が出来る。そこで三種のマラバトゥロンが出来、そしてこれを造る人達によって印度に運ばれる¹¹⁹⁾。」

この文章はベーサタイという種族が、毎年ティスとの境までマラバトゥロンの葉をもたらし、そこで一種の沈黙貿易と思われるものが行なわれ、このようにして獲得された葉がインドまで運ばれてくることを述べたものと解されるが、もとより伝聞によって書かれた文章だけに、この取引がどこでどの種族との間に行なわれたのか、その記述はすこぶる漠然としている。まずベーサタイ族については、テキストには *Sēsatai* と書かれている。ところで、プトレマイオスはガンジス川東方のブラマプトラ川の流域に住む種族として *Tiladai* 族をあげ、かれらは *Bēseidai* ともいい、体は小さく、肩幅は広く、毛深く、顔は幅広いが、皮膚の色は白いと書いている。この *Tiladai* すなわち *Bēseidai* 族の体質の叙述が、*Periplus* の *Sēsatai* のそれに類似しているので、*Sēsatai* はこの *Bēseidai* に相当するものであらうと考えられ、*Sēsatai* とあるのは *Bēsatai* の誤写であらうとされているのである。マックリンドルはこの *Bēseidai* 族は

「する *patra* をギリシア語風になまったものと考えられる。(Schoff, p. 281; 村川氏, 250頁.)

119) *Periplus*, 65, 村川氏, 125-26頁。原文はとくに前半の部分がすこぶる難解で、復元の困難な箇所もあり、人によってさまざまな解釈がなされている。ショッフの英訳は次の通りである。"Every year on the borders of the land of This there comes together a tribe of men with short bodies and broad, flat faces, and by nature peaceable; they are called *Besatae*, and are almost entirely uncivilized. They come with their wives and children, carrying great packs and plaited baskets of what looks like green grape-leaves. They meet in a place between their own country and the land of This. There they hold a feast for several days, spreading out the baskets under themselves as mat, and then return to their own places in the interior.……(Schoff, pp. 48-49) アンダーラインを施した部分が、とくに村川氏の邦訳とは異なっている。

117) Plinius, *N.H.*, XII, lix, 129; XXIII, xlviii, 93; 山田憲太郎氏著『東西香薬史』福村書店, 1957年, 89頁。

118) ペトゥロイ *petroi* はサンスクリットで「葉」を意味する。

今日のバングラデシュの北東部の、アッサムとの国境に近いところに位置している Silhet 附近に住む山地民族であろうと推定している¹²⁰⁾。プトレマイオスは続いて「最上のマラバトゥロンを産するという Kirrhadia のかなたには云云」と書いている。マックリンドルはこのことについて、ヒンドウスターニ語で *Cinnamomum albiflorum* の葉を *taj*, 樹皮を *tejpat* といい, Silhet, アッサム, Rungpur, および Masuri にいたるまでの山中に, この植物が自生していること, Rungpur がプトレマイオスの Kirrhadia に当ること, これらの地方から毎年この植物の枝と葉が大量に Vikramapura の市にもたらされて売られること, *taj* という語は, ベンガルの東部では, Kachār, Jyntiya, およびアッサムにたくさんある *Cinnamomum zeylanicum* や *Cassia lignea* の皮をもさしているという J. A. S. Beng の所説を引用している¹²¹⁾。

以上に述べたところから考えてみると, *Periplus* やプトレマイオスの地理書の書かれたころは, 今日のバングラデシュの北東部やアッサム, ビルマ方面に産するマラバトゥロンが, 未開の山地種族の手を通して送られてきたのではなかろうかと考えられる。ショッフは *Periplus* に「ティスの境」と記されているところから, このことはチベットが当時中国に属していたことを示すものであるとして, 今日のシッキムの Gangtok (27°20' N., 88°38' E.) 附近に歳市が開かれ, そこへ Chumbi 溪谷によって Cho-La 峠または Jelap-La 峠をこえて中国から青海, チベットを通る通路が通じていたと想定し, また Arun 溪谷によってネパールを通ってくる中国からの通路もあったと想定している。またウォーミントンは雲南およびビルマを通して中国の肉桂の葉が送られてきたと考え, さらにショッフと同様に, 一部はチベットを通して Chumbi 溪谷によっても送られてきたと想定し

ている¹²²⁾。中国からチベットを通してガンジス河口方面に絹が送られたと考えられることは, すでにⅧで述べた通りであるが¹²³⁾, 絹と違って東ベンガル, アッサム, ビルマ方面やヒマラヤ山中にマラバトゥロンを多量に産したとすれば, それより遠隔の中国方面からはるばる送られてきたとするのは, いかがなものであろうか。*Periplus* の上述の記述は, むしろ東ベンガル, アッサム, ビルマ方面に産するマラバトゥロンの輸送や取引を述べたものとする方が, むしろ合理的であるように思われる。そしてそれらはヒマラヤ山中のマラバトゥロンとともに, ガンジス河口から絹と同様に海上をリミュリケーの商業地へと輸送されて, 西方世界へ輸出されたものと考えられる。このことは, *Periplus* に商業地ガンゲースを通してマラバトゥロンが運ばれると記されていることからうかがわれよう¹²⁴⁾。

リミュリケー地方の商業地の輸出品の中には, 香料としてはさらに「ガンゲース産のナルドス」があげられ, マラバトゥロンと同様に商業地ガンゲースを通して運ばれることが記されている。ナルドスは西北インドのバルバリコンおよびパリュガザから, インドの諸方やアフガニスタン方面で産するものが輸出されており, Ⅷでいちおうの検討を加えたが, *Periplus* に記された「ガンゲース産ナルドス」については, ショッフや村川堅太郎氏は, これはガンジス川方面に産するものではなくて, ヒマラヤ山中に産する *Nardostachys Jatamansi*, すなわち *spikenard* であろうと推定しておられ, ショッフはこれを *Gangetic spikenard* と訳している。ワットによれば, これは Garhwal から東方に延び, シッキムで17,000フィート(5,200メートル)に達するヒマラヤ山中に産する多年生の草本で, 芳香を発して味は苦く, インドでは薬剤として用いられ, とくに毛髪成長と黒さを増すのに効果があると広く考えられている。プリニウス

120) Ptolemaios, VII, 2, 15; McCrindle, p. 218; Schoff, pp. 278-79; 村川氏, 249-50頁。

121) Ptolemaios, VII, 2, 16; McCrindle pp. 219-20.

122) Schoff, pp. 278-79; Warmington, p. 188.

123) 本稿(5), 41-42頁。

124) *Periplus*, 63; 村川氏, 124頁。

はナルドスに関する記述の中で、ガンジス川附近に別の種類のナルドスがあり、ozeanifidis と呼ばれ、悪臭を発すると書いていて、これを劣等品と考えていたようであるが、これは Spike-nard 以外のものを書いたものと考えられる¹²⁵⁾。

次に「多量の優秀な真珠」が輸出品としてあげられ、またコマレイからコルコイまでの地帯、すなわち今日のマンナル湾一帯には真珠の採取場があり、パンディオン王の所有に属し、罪人たちがその仕事に従事していること、マンナル島に比定されるエーピオドーロスの島でも採取されること、パラシムーンドゥーすなわちセイロン島やガンゲース方面にも真珠を産することが記されている。真珠はペルシア湾のバハレイン島附近でも採取され、これが西方世界で優秀なものとして珍重されたことは、すでにⅦで述べたが、*Periplus* の作者はペルシア湾の真珠は劣等であり、インドの真珠が優秀だと信じていた。このことはすでに述べたように、かれがペルシア湾方面のことを直接知らなかったからだと考えられる。プリニウスはペルシア湾のバハレイン島の真珠がとくに優れていると書いており、またこの湾内の Stoidis にも真珠採取場のあることを書いているが、さらに真珠が主として送られてくるのはインド洋からであり、なかでももっとも多量に産するのはセイロン島で、またインド半島の突端部にも産することを書いている。かれはまたローマで真珠が知られるようになったのは、ユグルタ Jugurtha 戦争（前112～106年）のときであり、その使用が一般的になるのは、ローマがアレクサンドリアを占領してからのことであると書いている。ここにいるローマのアレクサンドリア占領とは、カエサルがポンペイウスを追ってアレクサンドリアに進撃し、クレオパトラと結んでここに勢力をうちたてたことをさすものとすれば、それは前48年のことである。もっともすでにネアルコス（ネアルコス）はペルシア湾の入口に近い島に、多量に真珠を産することを知っていたし、メガステネスはセイ

ロン島がインドよりも大きな真珠を産することを書いている¹²⁶⁾。したがって真珠はユグルタ戦争よりずっと以前に西方世界に知られていたのであるが、婦人たちがたくさんの真珠を身につけて、華麗さを競うようになったのは、ローマ帝国時代に入ってからのことであったようであり、*Periplus* の書かれたころは、リミュリケー地方の商業地から真珠が盛んに輸入されるようになっていたのである。当時はインドの主要な真珠産地は、*Periplus* に記されているように、マンナル湾一帯の地方であったと考えられ、この湾のインド側の沿岸から6～8マイルあたりの洲やセイロン島西側の北岸から16～20マイルあたりの洲が、その重要な採取場であったようである。ただし、ガンジス川地方の真珠は形が小さく、不整形で、色も赤味を帯びており、優秀ではない¹²⁵⁾。中世においてもマンナル湾地方が真珠の重要な産地であったことが、マルコ・ポーロの記事から推測される。かれは中国から帰還の途中通過した Maabar 地方に関する記事の中で、セイロン島とインド本土との間の湾で、きわめて優秀で大きな真珠が採取されるといって、4月のはじめから5月なかばまで潜水夫が4尋から12尋ぐらいの深さの海底にもぐって、真珠を採取することを、詳細に記している。上述の Maabar はイスラム教徒がコロマンデル海岸地帯を呼んだ呼称であり、また真珠の採取の行なわれるセイロン島とインド本土との間の湾は、マンナル湾をさしていると考えられる¹²⁸⁾。

輸出品としてあげられている海の産物には、真珠のほかに亀、すなわち亀甲がある。東アジアでは亀甲、とくに瑤瑁が櫛、筭、その他の装

126) Plinius, *N.H.*, VI, xxviii, 110; xxxii, 148; IX, liv, 106; lix, 123. ネアルコスについては Strabon, XVI, 3, 7, メガステネスについては Plinius, *N.H.*, VI, xxiv, 81の引用による。

127) Warmington, pp. 167-68; Schoff, pp. 222, 239-41, & 256; 村川氏, 236頁および244頁. なおワットによれば、今日ではもっとも真珠の産出量の多いのはセイロン島である。(Watt, pp. 557-58.)

128) Marco Polo, III, xvi (Yule, *Marco Polo*, II, pp. 331-32.)

125) Schoff, p. 256; 村川氏, 244頁; Watt, p. 792; Plinius, XII, xxvi, 42. なお本稿(5), 33-34頁参照。

身具などに早くから用いられた。西方世界でも亀甲が早くから用いられたが、ウォーミントンは紀元1世紀のはじめごろからその使用が普及し、とくに貴重な家具の化粧張りに用いられ、なかでも象牙製の寝台の床架の装飾に用いられたといっている。*Periplus*にはクリュソネーソス、すなわちマライ半島方面やリミュリケー地方の前面の島々で捕えられた亀が、この地方の商業地に運ばれてき、またセイロン島にも産することが記され、とくにマライ半島方面には「エリュトゥラー海の総ての場処の中で最もよい亀」を産することが記されている。またプリニウスはセイロン島では亀の捕獲が盛んで、家屋の屋根に亀甲が用いられると書いている。ワットはインド方面の亀として、*Chelone imbricata* (瑇瑁)、その他4種類の亀をあげているが、瑇瑁はセイロン島およびマルディーフ諸島方面にとくに多く産し、古代から好んで装飾品の素材として利用され、西方世界へも早くから輸出されていたと述べている¹²⁹⁾。すでに述べたように、亀甲はアフリカ東岸のアドゥーリ、アウアリテース、およびアザニア地方、ならびにソコトラ島からも輸出されたことが、*Periplus*に記されており、当時のインド洋の貿易品のうちで、重要な地位を占めていたものと考えられる。

次に象牙が輸出品としてあげられており、また東海岸のオリッサ地方に比定されるデーサレーネー地方に、ボーサレー *Bōsarē* と呼ばれる象牙を産することが、*Periplus*に記されている。この *Bōsarē* はおそらく *Dēsarē* の誤写で、デーサレーネーに由来するものであろうと推定されており、ショッフはこの部分を *ivory known as Dosarenic* と訳している。ショッフによれば、オリッサ地方の象牙は早くから有名で、『マハーバーラタ』や *Vishnu Prāna* に記されているという¹³⁰⁾。*Periplus*にはボーサレーの象牙がリミュリケー地方へ運ばれるとは書

かれていないが、ガンジス方面の貨物が沿海上をリミュリケーへ輸送されるという点から見て、この象牙もおそらくその一部は同様に海上をリミュリケー地方の商業地へ輸送されたものと思われる。象牙は西北インドのバリュガザの輸出品の中にもあげられており、またアフリカ産の象牙が盛んに西方世界へ送られたことが、*Periplus*には記されているが、ワットはアフリカ産のものがインド産のものよりはるかに上質だと述べており、また村川堅太郎氏はインドの象牙は多くインドで消費されたいと述べておられる¹³¹⁾。しかし、プリニウスはインド産のもの以外、象牙の供給がすくなくなると書いている。このことは、帝国時代に入ってから奢侈生活の急速な発達によって、象牙の消費が著しく増大したことにより、アフリカ産の象牙資源が減少してきたことを示すものとも考えられる。ウォーミントンは帝制樹立いらいインド産の象牙に関する記述が多くなり、またアフリカ東岸の南方への探検が進んだことを指摘して、これらのことは象牙の消費の増大とそれに伴うアフリカ産象牙の供給の減少によっておこったものであろうと推定している¹³²⁾。

次に絹織物が輸出品としてあげられており、また「セーレスの羊毛と糸と織物」がガンゲース川を通じてリミュリケーへと運ばれることが、*Periplus*に記されているから、リミュリケー地方の商業地から輸出された絹織物は、中国からガンジス川方面に送られたものが、ガンジス河口から海路リミュリケーの商業地へ運ばれたものであったと考えられる。このことについては、

131) 本稿(5)、42-43頁参照。

132) Plinius, *N.H.*, VIII, iv, 7; Warmington, p. 164.

なお帝国時代初期のローマで象牙が大量に消費されたことについては、たとえばスエトニウスがカリグラ帝は自分の愛馬に大理石のうまやや象牙製のかいば桶を与えたとか、ネロ帝の建造した宮殿の食堂には、象牙のごう天井がとりつけられたということを書いており、またディオ・カッシウスがセネカは金持の豪奢な生活を非難しながら、かれ自身は3億セステルセースの財産をもち、また脚部が象牙でできている500脚のテーブルをもっていることなどから推測されよう。(Suetonius, *Caligula*, LV & *Nero*, XXXI; Dio Cassius, *Roman History*, LXI, 10, 3.

129) Warmington, pp. 166-67; Plinius, *N.H.*, VI, xxiv, 91; Watt, pp. 1079-80; Schoff, p. 227; 村川氏, 232-33頁。

130) 村川氏, 241頁; Schoff, pp. 47 & 253.

すでにⅧで述べたので、ここでは詳細は省略することとする¹³³⁾。

次にさまざまな透明石、金剛石、およびヒュアキントスの3種類の貴石が輸出品としてあげられている。まずさまざまな透明石については、セイロン島の産物の記述にも見られるが、これは主として beryl (緑柱石) 系の石であろうと考えられている。ワットによれば、これは濃い緑色のエメラルドや海碧色の藍玉 (aquamarine) などをいうという。プリニウスは beryl はインドに産し、それらはすべて滑かな六角形に切られ、そのもっとも貴重なものは海水の清らかな碧色を呈すると書いている。またプトレマイオスはリムリケー地方の記述の中で、「beryl を産する Pounnata」をあげている。この Pounnata について、マックリンドルはユールの地図では Seringapatam 附近におかれているが、比定は困難であると述べている。しかし、スミスはマイソールの南西の Kittur (Kāviri 川に注ぐ Kabbani 川のほとりにある) に近いところであろうと推定するとともに、そのほかコインバトールの町から東南東40マイル (約65キロ) のところにある Padiyūr (Pattīālī), および Salem 地方の北東隅にある Vāniyambādi の2カ所に beryl の鉱山のあることを指摘している。またワットは上述の Padiyūr を beryl の産地としてあげている。さらにウォーミントンがスミスのあげた3つの産地のうち、コインバトール地方のものは Ponnani 川によってテュンディスおよびムージリスへ、マイソール地方の Pounnata 産のものはナウーラおよびムージリスへ運ばれ、Salem 地方産のものはチョーラ王国の沿岸 (東海岸) へ運ばれ、そこからマラバル沿岸へ送られたものと推定している。いずれにしても、リムリケー地方の商業地の後背地やセイロン島の山中にさまざまな透明石を産し、それらが盛んに西方世界へ輸出されて珍重されたのである。マルコ・ポーロはマーバル地方の記述の中で、王がルビー、サファイヤー、エメラルドなどの貴石だけでつくられた頸飾りを着

133) 本稿 (5), 41-42頁参照。

用すると書いているから、中世においても南インドにこれらの貴石類を産したことが推測される¹³⁴⁾。

金剛石、すなわちダイヤモンドは、テキストには *ādāmas* と書かれている。この語は「征服しえない」という意味で、そこからもっとも堅い金属として、鋼鉄およびダイヤモンドを意味するようになった。ここではもちろんダイヤモンドを意味しているものと解される。プリニウスは *adamas* について、人間のもっている宝石のうちでもっとも高価なものであり、それには6つの種類があるといっている。その中に石英、鉄、金剛砂などをも含めているようであるが、中でもインド産のものは、その透明さおよび表面の滑かさにおいて水晶に似ていると述べているので、これはダイヤモンドをさしているものと考えられる。そうだとすれば、プリニウスはインドにダイヤモンドを産することを知っていたと考えられるが、ワットはインドが長い間ヨーロッパに供給されるダイヤモンドの唯一の源泉であったといっている。かれはまた南インドのダイヤモンドの産地として、Cuddapah, Bellary, Karnur, Kistna, および Godavari をあげている。中世においてもインドにダイヤモンドを産したことが、たとえばマルコ・ポーロの記事によってうかがうことができる。かれはマーバルから1,000マイル (約1,600キロ) ほど北方の Mutfli 王国に関する記事の中で、この国の高い山中にダイヤモンドを産するとして、3つの採取法を述べている。ユールによれば、この王国は当時ハイデラバード北東の Warangol で統治していた Kākatēya もしくは Ganapati 朝の支配した Telingana 王国であると考えられ、また Mutfli はマドラス州の Gantūr 地方にある Motupallé という港のアラビア語化した呼称であると考えられる¹³⁵⁾。

134) Watt, p. 556; Plinius, *N.H.*, XXXVII, xx, 76; Ptolemaios, VII, 1, 86; McCrindle, p. 181; Smith, p. 461; Warmington, pp. 250-51; Schoff, pp. 222-24; 村川氏, 231頁; Marco Polo, III, xvii (Yule, *Marco Polo*, II, p. 338.)

135) Plinius, *N.H.*, XXXVII, xv, 55-57; Watt, pp. /

最後にヒュアキントス *δάκνθος* は、ギリシア語では花のヒアシンスを意味すると同時に、風信子石 (jacinth), ルビー, 紫水晶, サファイヤーなどの貴石をも意味する語であるが, *Periplus* に記されたヒュアキントスはサファイヤーをさしていると考えられている。プリニウスはヒュアキントスと紫水晶を区別して、紫水晶の特徴である紫色の明るい輝きが、ヒュアキントスの場合にはヒアシンスの花の色あいに薄められていると書いている。このことについてショッフは、多分プリニウスは紫色のサファイヤーのことをいっているものと推測し、かれの用いているヒュアキントスという語は、実際は青から紫にいたるあらゆる色あいのサファイヤーを意味しているといっている。この石はインド内地よりも、むしろセイロン島に多く産したらしく、プトレマイオスはセイロン島の産物として, beryl とともにヒュアキントスをあげている。また 6 世紀のコスマスはセイロン島には 2 人の王がおり、1 人はヒュアキントスの地方を領有し、他方は残りの部分を領有していること、この島には多数の寺院があり、その 1 つには松かさほどの大きさのヒュアキントスがあつて、それが日光に照らされて光り輝いているさまは、またとない眺めであるといっている。Goodchild によれば、ヒュアキントスはセイロン島南部の砂礫層に主として産し、同じ化学構成物であるルビーも同じところに産するという。も

しろんセイロン島のヒュアキントスは、リムリケー地方の商業地に運ばれて、輸出されたものであろう。また同じところにルビーも産するとすれば、これも同様の径路で輸出されたと考えられる¹³⁶⁾。

以上に述べたように、リムリケー地方の商業地からは、胡椒、マラバトゥロン、ナルドスの香料類をはじめとして、真珠、亀甲、象牙、さまざまな透明石、ダイヤモンド、サファイヤー、さらに絹織物が輸出された。インドの特産物として古くから知られていた綿織物は、輸出品のリストの中には見当たらないが、アルガルレーやセイロン島やガンゲース地方では、上質の綿布が輸出されることが、*Periplus* に記されているところから見て、これらも輸出の対象とされたと考えてさしつかえあるまい。これらの輸出品の中には、南インド地方の産物ばかりでなく、セイロン島、東海岸のオリッサ地方やガンジス川流域方面、ヒマラヤ山中やアッサム、ビルマ、マライ半島の物産、さらに中国産の絹織物までが含まれている。これらはすべて土着の船舶によってリムリケー地方の商業地へと輸送されたものと考えられる。

これらの輸出品のうち、とくに重要な地位を占めていたと考えられるものは、胡椒、マラバトゥロン、真珠、エメラルド、サファイヤーなどの貴石類であったようである。これらのものは帝国時代初期のパックス・ロマーナの下で急速に華美な風潮のたかまってきた西方世界で、上流社会の人々のもっとも熱心に求めたものであった。西方世界の商人はこれらの珍奇な品物を求めて、はるばる万里の波濤を乗りこえて、リムリケー地方の商業地へと大胆きわまる航海を行なったのである。

輸 入 品

リムリケー地方の商業地の輸入品について

- 136) Plinius, *N.H.*, XXXVII, xli, 125; Schoff, pp. 226-27; 村川氏, 232頁; Ptolemaios, VII, 4, 1; Kosmas *Indikopleustes*, XI (McCrinkle's Translation, pp. 364-65); W. Goodchild, *Precious Stones*, p. 183 (Schoff, pp. 226-27 による。)

556-57; Schoff, pp. 224-26; Warmington, p. 236; 村川氏, 231-32頁; Marco Polo, III, xiv (Yule, *Marco Polo*, II, pp. 359-63.) マルコ・ポーロは冬季山中に大雨が降り、雨水が奔流となって流れた溪谷の水のひいたあとに、多数のダイヤモンドが見つかること、ダイヤモンドを産する山は高峻で、暑さも激しく、その上蛇が多くて近づけないので、夏は肉を細長く切ったものを山中の深い溪谷に投げこむと、蛇の好きな鷺がダイヤモンドの付着したこの肉片をくわえて巣にもどるので、鷺を追ひ払ってダイヤモンドを手に入れること、また鷺のふんや胃袋からもダイヤモンドがえられるという、3種類の採取法を書いている。このうち第2の採取法については、『アラビアン・ナイト』のシンドバッドの冒険の話の中にこれに類似した採取法の出てくことは周知の通りである。なおユールはダイヤモンドの産地として、Gorconda の名で知られているキストゥナ川の沖積土地帯、Kaḍapa, および Karnúl の3ヵ所をあげている。(Ibid., p. 362.)

は、*Periplus* には次の通り記されている。

きわめて多量の貨幣、クリュソリトン chrysoliton, 混ぜもののない衣服少量、ポリュミタ polymita, スティーミ stimi, サンゴ, 未精製のガラス石, 銅, 錫, 鉛, ちょうどバリュガザに輸入される程度の少量のブドウ酒, サンドラケー sandarakē, アルセニコン arsenikon, 商人らは用いないので水夫らの用に足るだけの麦¹³⁷⁾。

まず冒頭にあげられている貨幣については、*Periplus* には「極めて多量の貨幣」と記されており、貨幣がこれらの商業地のもっとも重要な輸入品であったことを示唆してくれる。もっともこれらがどの貨幣かについては、作者はなにも述べていないが、これらがローマのデナーリウス金・銀貨であったことは、推測するに難くはない。なぜならローマのデナーリウス金・銀貨が、南インドでは多量に発見されているからである。ウィーラーによれば、ローマの貨幣はセイロン島を除くインド、パキスタンをあわせたインド亜大陸全域で、68カ所から発見されているが、そのうちすくなくとも57カ所がヴィンディヤ山脈以南の地域に属しており、しかも紀元1世紀のものは、タキシラ Taxila で発見されたティベリウス帝のばらばらになったデナーリウス貨幣を除いて、すべて南部で発見されている。さらに注意すべき点は、紀元1世紀のローマ貨幣は金貨もしくは銀貨だけで、青銅貨は発見されておらず、しかもこれらの貨幣のうちで圧倒的多数を占めるものは、アウグストゥス帝、とくにティベリウス帝のものであり、ネロ帝以降のものはいちじるしく減少しているということである¹³⁸⁾。

いずれにしても、帝国時代初期のローマの南インド貿易においては、胡椒、マラバトウロン、真珠、透明石などを多量に輸入した見返りとして、さまざまな商品をもたらしはしたが、それだけではとうていバランスがとれず、貿易差額を埋めるために、多量のデナーリウス金・銀

貨をもってゆかなければならなかったのである。この間の事情は西北インドとの貿易の場合も同様であり、とくに良質のアウグストゥス、ティベリウス両帝の貨幣が好んで受け入れられたのであった。ただし、西北インドの場合は、これらのローマ貨幣はほとんどが溶かされて、とくに金貨はクシエン朝の金貨に改鑄されたと考えられるが、南インドのタミール諸国は金・銀貨を発行せず、輸入されたデナーリウス金・銀貨は通貨としてではなく、単に金・銀塊として交換の具に利用されたものと考えられる¹³⁹⁾。そしてそれらが蓄えられたものが、今日遺宝の形で所々に発見されているのであって、これらの遺宝は数個の貨幣からなる少数の場合から数百個の多数におよぶものさえ見られるのである¹⁴⁰⁾。しかも紀元1世紀のローマ貨幣からなる遺宝の発見地は、とくにコインバトール地方に集中しており、この地方とその周辺だけで、インド亜大陸の他のすべての地域から発見されたよりも多くのローマの金・銀貨が発見されており、コインバトール地方だけで紀元1世紀のローマの金・銀貨数百個を含む遺宝の発見地は、すくなくとも11カ所をかぞえている¹⁴¹⁾。このことは、この地方が西方世界でとくに需要した胡椒および緑色エメラルドの産地であり、また東海岸と西海岸とを結ぶ交通路がこの地方を通過していたことによるところが大きかったものと考えられる¹⁴²⁾。

139) ウィーラーはこのことについて、次のように述べている。ローマの金・銀貨の「大部分は通貨としてではなく、金銀塊として利用されたというのが、明瞭な解答である。(中略)輸入貨幣の大部分は、金銀塊としてのみ用いられることができ、今日インドの市場で銀飾りや銀片が計量されるように、商品と交換に計量されたのである。」(Wheeler, *Rome*, p. 140 [糸賀氏訳, 164頁。])

140) たとえば、おそらくチョーラ王国に属していたと考えられる Pudukottai で1898年に発見された遺宝は、アウグストゥス帝(51個)、ティベリウス帝(193個)、ガイウス帝(5個)、クラウディウス帝(126個)、ネロ帝(123個)、ヴェスパシアヌス帝(3個)、計501個の金貨からなっていた。またコインバトールの Vellalur 地方で1842年に発見された遺宝の場合は、アウグストゥス帝(136個)、ティベリウス帝(380個)、ガイウス帝(1個)、クラウディウス帝(5個)、計522個の銀貨からなっていた。(Warmington, pp. 280 & 283.)

141) Wheeler, *Rome*, p. 143 (糸賀氏訳, 168-69頁。)

137) *Periplus*, 56, 村川氏, 118-19頁。

138) Wheeler, *Rome*, pp. 137-39 (糸賀氏訳, 162-63頁。)

このように *Periplus* の書かれたころは、きわめて多量のローマのデナーリウス金・銀貨が南インドにもたらされて、貿易差額が補なわれたのであったが、ネロ帝以後の銀貨は南インドではほとんど発見されておらず、また金貨の発見もヴェスパシアヌス帝 (69~79在位) 以後のものはずっとすくなくなっている。その上ローマ貨幣の発見地も、タミール地方の南部よりは北部およびそれより北方の地域に移っていることが注目される¹⁴³⁾。このような現象はいったいどのように解したらよいのであろうか。

ネロ帝はかれの治世の中ごろから金・銀貨の改鑄を行ない、金貨はアウグストゥスの標準貨 1 ポンドにつき 84 アウレイ aurei を 96 アウレイに、また銀貨は 84 を 92 に貶質した¹⁴⁴⁾。ネロ帝以後の銀貨が南インドにほとんど発見されず、金貨もヴェスパシアヌス帝以後のものがすくないのは、このような貨幣の改悪がその一因であったと考えられる。しかしそれと同時に、ネロ帝歿後の混乱をおさめて帝位についたヴェスパシアヌス帝が、金・銀流出の抑制をはかったことによるところも大きかったものと考えられる。ヴェスパシアヌス帝は卑賤の生れで、スエトニウスによれば、父は Halvetia で金融業を営なみ、かれ自身も一時は螺馬で商売を営なみ、そのため螺馬追いと呼ばれた人物であったが、それだけに「すぐれた実際的な感覚と財政能力をそなえた人物」であり、「ネロの濫費と内乱によってぐらついていた帝国の財政を回復」することに努力した¹⁴⁵⁾。したがってかれはその財

政政策の一環として、インドへの金・銀貨の流出を抑制し、これをバーター・システムにきりかえることに努めたものと考えられる¹⁴⁶⁾。しかし、ヴェスパシアヌス帝以後のローマ貨幣の、インドにおける発見地の分布に生じた変動は、どのようなことを意味しているのであろうか。インドにおけるローマ貨幣の研究に夙に業績をあげた Sewell は、ヴェスパシアヌス帝以後奢侈貿易が停止されて、貿易の重点が北方の綿花栽培地帯へ移行したことを示唆したが、ウォーミングトンはこの考えを斥けて、むしろバーター・システムによって南インドの東西の両沿岸に貿易が拡大していったことを推定している¹⁴⁷⁾。貨幣の分布状況から見れば、シュウェルの説くように、西海岸方面、それもタミール地方の北部からさらにその北方に、西方世界の商人の貿易活動が移っていったことを示唆しているようにも思われるが、胡椒、その他の獲得を目ざした奢侈貿易が、ヴェスパシアヌス帝の政策によって一挙に停止したとは、もとより考えられない。ヴェスパシアヌス帝以後のローマ貨幣も、すくなくなったとはいえ、タミール地方でも発見されている。貨幣分布に見られる上述の変動は、むしろ西方世界の商人の貿易活動が、タミール 3 国の領域をこえて、コロマンデル海岸沿いに北方へ拡大していったと考えるべきかも知れない。ウィーラーは石英系の貴石類(めのう、紅玉髓、縞めのう、碧玉、水晶、紫水晶)の産地が、グジャラート地方を除けば、中央大山塊の東斜面および山麓に集中しているので、これがローマの貿易を東海岸方面にまで拡張させる一因になったと考えている¹⁴⁸⁾。いずれにしても、西方世界の商人がしだいに東海岸方面へ進出していったことは、十分考えられるところであり、やがて 1 世紀末か 2 世紀はじめには、コモリン

142) Wheeler, Arikamedu, p. 116; ditto, *Rome*, pp. 143-45 (糸賀氏訳, 168-70頁)。ウィーラーはこのほか、コインパトール地方が、タミールの伝承によれば、タミール 3 国の接合地点であり、そうだとすれば、この地方は常に略奪行為にはもってこいの地域であったと考えられるので、財宝の隠匿が行なわれたことも考えられると述べている。(Wheeler, *Rome*, p. 145 [糸賀氏訳, 169頁。])

143) Warmington, pp. 278-79.

144) Tenney Frank, *Rome and Italy of the Empire* (*An Economic Survey of Ancient Rome*, Vol. V.), Johns Hopkins Pr., 1940 (reprint, New Jersey, 1959), p. 35.

145) Suetonius, VIII, Divus Vespasianus, Divus Titus, Domitianus. I, 3 & II, 1; ボールズドン編, 長谷川博

隆氏訳『ローマ人——歴史・文化・社会』岩波書店, 昭和46年, 96頁。

146) Warmington, pp. 293-94.

147) Sewell "Roman Coins Found in India" (*Journal of Roman Studies*, XXXVI, 1904, pp.620-35.) (Warmington, p. 294 および村川氏, 212頁による.); Warmington, p. 294.

148) Wheeler, Arikamedu, p. 123.

岬を回航して東海岸を北上するようになっていったのである。

貨幣に続いてあげられているさまざまな輸入品の大部分も、バリュガザやバルバリコンの輸入品と共通している。それらのうちクリュソリトンは、紅海の Ophiodes 島に産するとストラボンの書いているもので、黄玉であると考えられる。混ぜもののない衣服は良質の衣服であり、おそらくエジプト産であったと考えられる。西北インドではこれらが多量に輸入されたが、リミュリケー地方では少量が輸入されたわけである。ポリュミタは「たくさんの metos (糸) で織った織物」で、やはりエジプト産であった。スティーマは東アラビアやカルマニア地方に産する柱状結晶をなした輝安鉱で、粉末にして薬剤に用いられたようである。サンゴはヨーロッパ産であったと考えられる。もっともタミールの古詩には東海岸のカマラ (Kāvēripaṭṭam) へは東方からサンゴが送られてくることがうたわれている¹⁴⁹⁾。未精製のガラス石はエジプトかシリア産であったと思われる。銅・錫・鉛はヨーロッパの産物であったと考えられる。南インドのニルギリスやアデイチャナールの墳墓から発見された青銅製の像や容器には、輸入された錫が豊富に用いられていると、ゴードン D. H. Gordon は推定している¹⁵⁰⁾。ブドウ酒はイタリア産かシリアのラーオディケイア産、あるいはアラビア産のものもあったかも知れない。ブドウ酒については、「バリュガザに輸入される程度の少量の」と記されているが、すでに述べたように、アrikamedu の遺跡からはブドウ酒をいれたと考えられるアムポラが、紀元 200 年ごろをもって終る後期の層までひきつづき出土しているところから見ると、西方世界産のブドウ酒が一貫して輸入されていたと考えられる。タミールの古詩にも、パーンディア王国の王族が、ヤヴァーナの船でもたらされた、冷たくて香り豊かなブドウ酒を飲むようにすすめられる光景

149) Mookerji, p.95.

150) ゴードン著、青江舜二郎氏訳『先史時代のインド文化』(The Prehistoric Background of Indian Culture, 1963)、紀伊国屋書店、1972年、257頁。

がうたわれている¹⁵¹⁾。またサンダラケーは砒石の紅色硫化物で、主としてペルシアおよびカルマニアから送られてきたものと考えられる。これらの輸入品については、すでにⅧで述べたので、ここではこれだけにとどめておくが¹⁵²⁾、これらの輸入品は、ペルシア湾方面から送られたと思われるスティーマやサンダラケーを除けば、ほとんどが西方世界の船舶がもたらしたもののといってよからう。

このようにリミュリケー地方の商業地の輸入品として *Periplus* にあげられているものは、そのほとんどが西方世界産のもので、西北インドの商業地の輸入品と同種のものであった。西北インドの商業地の輸入品に見られないものとしては、わずかにアルセニコンと麦があげられているにすぎない。アルセニコンは砒石 (arsenic) の硫化物である雄黄で、ペルシア湾方面から送られてきたものと考えられる。プリニウスはカルマニア地方の記述の中で、Hyctanis 川が船舶の避難所を提供し、黄金を産すること、ペルシア王がこの川まで支配の手を延ばしたことなどを述べるとともに、その附近に銅、鉄、赤鉛とともに arsenicum を産することを書いている。アルセニコンは主として黄色の顔料として用いられた。ウォーミントンはこの顔料がインドおよびセイロンの古画に用いられていることを指摘している¹⁵³⁾。

最後に麦については、*Periplus* に「商人等是用ひないので水夫等の用に足る丈の麦」と記されている¹⁵⁴⁾。ここに述べられている「商人」は、おそらく土着のインド人商人をさしているものと考えられ、かれらは米を常食としているので、麦を「用ひない」と書かれたものと思われる。これに対して「水夫」は西方世界の船舶の船乗りをさしているのであろう。かれらは小麦を常

151) Wheeler, Arikamedu, p.21.

152) 本稿(5)、45頁以下参照。

153) Plinius, *N.H.*, VI, xxvi, 98; Schoff, p. 221; 村川氏, 230頁; Warmington, p. 270.

154) *Periplus*, 56, 村川氏, 119頁。なおショップはこの部分を次のように英訳している。“wheat enough for the sailors, for this is not dealt in by the merchants there”. (Schoff, p. 45.)

食としているので、かれらの用いるだけの小麦を西方の船舶が積んできたことを、上述の文章は述べたものと考えられる¹⁵⁵⁾。そうだとすれば、麦は南インドの輸入品とはいい難いようである。

以上 *Periplus* にあげられた輸入品について検討してみたが、西方世界から送られたものは、これらのものだけではなかったようである。すでに述べたように、アリカメドゥからは西方世界産の3種類の土器が発見されている。またこの遺跡からは、この遺跡の発掘の端緒となったアウグストゥス帝の頭部を刻した珠玉が採集されており、さらにキューピッドと明らかに驚と考えられる1羽の鳥を現わしたグレコ・ローマン型の珠玉も発掘された。もっともこの方は西方世界出身の手工業者がインドで製作したものかも知れないとも考えられている。これらのほか、この遺跡からはローマン・ランプの破片が2個発見されたが、そのうち1個は紀元1世紀はじめごろのものようである。さらに白っぽい玉虫色のガラス器 (pillar-moulded bowl) の破片と青いガラス製碗の破片も発見され、前者は前1世紀末から後1世紀末にかけて地中海一円に広がったタイプのもので、イタリア産と推定されている。これらの出土品はいずれもイギリス隊の発掘したものであるが、フランス隊も上述の pillar-moulded bowl に類似したガラス器の破片を4ないし5個発見している¹⁵⁶⁾。これらのものは、西方世界の船舶がリムリケー地方の商業地にもたらしたものと考えられる。

これまで述べてきたように、紀元1世紀には西方世界の商人が大型の船でインド洋を横断し、南インドのマラバール沿岸の商業地に盛んに来航して、活発な貿易を営んだのであった。かれらは南インドに産する胡椒、透明石、真珠などを盛んに買いつけたばかりでなく、セイロン島産の真珠や透明石や亀甲、東海岸のオリッサ方面に産する象牙、ヒマラヤ山中やアッサム、

ビルマ方面に産するマラバトゥロン、マライ半島の海域に産する亀甲、さらに中国からガンジス川方面を通して送られてくる絹織物など、遠隔の地方の物産をも、これらの商業地で手にいれることができた。したがって、かれらは回航に困難なコモリン岬をまわって、西海岸の商業地やセイロン島へ航行することはなかったものと考えられるが、胡椒や透明石を産するリムリケー地方の内地に進出して、これらを直接産地で買いつけるとともに、さらにこれらの産地を通して走っている陸路を利用して、西海岸の商業地へも進出していったものと思われる。

かれらはこれらの商品の見返りとして、主として西北インドの商業地にもたらしたものと同じ種類の商品を運んできた。しかし、これらの商品だけでは、とうていかれらの求める大量の奢侈品の支払いにはことたりなかった。そのためかれらは貿易差額を補うために、多額のデナーリウス金・銀貨をもってこなければならなかった。南インドではこれらの金・銀貨を通貨としてではなく、地金として交換の具に利用したものと考えられ、それらが今日遺宝の形で多量に発見されているのであって、とくにネロ帝以前の金・銀貨の遺宝は、タミール諸国の南部で主として発見されている。

ところで当時南インドの商業地に来航した西方世界の商人の中には、商業上の目的でこれらの商業地に長期間滞在したものもあったらしく、これらの商業地には西方商人の商館や根拠地が設けられていたようである。西海岸の Kāvēripattam に比定されるカマラの繁栄をうたったタミールの古詩は、すでに述べたように、この商業地にヤヴァーナの居留地があり、そこには西方世界からもたらされた商品がならべられて、販売されていたことを伝えている。またムージリスにはアウグストゥス帝に捧げた神殿のあったことが、3世紀につくられたと考えられる Peutinger の地図から知ることができるが、この神殿はおそらくこの商業地に在住していた西方商人の建設したものであろう。そればかりでなく、タミール諸国の王室はヤヴァーナを兵士

155) 村川氏, 230頁.

156) Wheeler, Arikamedu, pp.101-102.

や衛士として使用していたことが、タミールの古詩からうかがうことができる。たとえば、これらの詩の1つには、パーンディヤ王 Aryappadai-Kadantha-Nedunj-Cheliyan の治世に、ローマ人の兵士が首都のマドゥラーの城門を警備するためにやとわれていることがうたわれており、また別の詩にはタミール王の戦場のテントの場景が「壁用の2重の粗布を鉄の鎖でしっかりととりつけたテントは、力強いヤヴァーナたちにまもられている。かれらのきびしい顔つきは、見るものすべてに恐れを抱かせ、かれらの長くゆったりとした上衣は、ベルトで腰にしっかりとつけられている」とうたわれている¹⁵⁷⁾。あるいはまたチョーラ王の宮殿の建設工事に、Magadha の職人や Maradam の工人、Avanti の鍛冶工とならんで、ヤヴァーナの大工が参加したことをうたった詩もある¹⁵⁸⁾。またヤヴァーナの工人は攻囲器 (siege-engine) の製作の巧みさのゆえに、南インドで好んで用いられたことも指摘されている¹⁵⁹⁾。

このようにローマ帝国時代の初期には、西方世界と南インドはすこぶる密接な関係にあり、単に商人や船乗ばかりでなく、さまざまな人々が南インドにおもひて活躍していたことがうかがわれるのである。そしてやがてヴェスパシアヌス帝の政策によって、多額の金・銀貨の持ち出しは抑制されることとなって、バーター・システムに切りかえられていったようであるが、西方世界の商人の活動範囲はここからしだいにインドの東海岸方面に拡大されていったものと考えられる。ネロ帝以後のローマ貨幣の出土状況がこのことを物語ってくれるが、他方、2世紀の中ごろに書かれたと考えられるプトレマイオスの地理書もこのことを裏書きしてくれる。かれの利用したテュロスのマリノスの書には、すでに述べたように、インドからさらに東方に航海したアレクサンドロスという人物の情報が用いられていたため、かれはインド以東の

状況について、*Periplus* の作者よりもはるかに詳細な記述を行なうことができたのである。また『後漢書』西域伝、卷第八十八の大秦国の条には、大秦国、すなわちローマ帝国が漢と直接交易をしようと思っていたが、安息(パルティア)の妨害によって漢におもむくことができなかったことを述べたのに続いて、「至桓帝延熹九年(西暦166年)。大秦王安敦遣使。自日南徼外獻象牙・犀角・瑇瑁。始乃一通焉。」と記されている。この大秦王安敦はローマ皇帝アントニヌス・ピウス(138~61在位)に比定されている。もっともこの書には、これに続いて「其所表貢並無珍異。疑伝者過焉。」と記されていて、ローマ皇帝の使節の貢納物が象牙、犀角、瑇瑁という、いずれも南海地方に産するものばかりで、中国にとってそれほど珍重すべきものではなかったもので、これはこのことを伝えたものの誤りではなかろうかと、撰者は疑問を投じているが、この記事は南海地方に進出していった西方世界の商人が、中国との貿易を行なおうとして、ローマ皇帝の使節と名のって入貢したのではなかろうかと考えられている。またインドシナ半島の最南部の西海岸近くに位置しているカンボジアの Oc-èò の遺跡からは、2個のローマの金貨が出土している。その1つはアントニヌス・ピウス帝の治世第15年、すなわち紀元153年のものであり、他はアントニヌス・ピウス帝かもしくはそのあとで帝位についたマルクス・アウレリウス帝(161~80在位)のいずれかのものであろうと推定されている。この遺跡は今日では海岸から20数キロ内地に入ったところに位置しているが、かつては運河によって海と結ばれていたことが推測され、1世紀末ごろから7世紀前半にかけてカンボジア地方を支配した扶南国の貿易港ではなかったかと考えられている。この遺跡からは、そのほかインドまたはそれ以西からの文化的影響の認められる宝石細工、金細工、錫細工等々のさまざまな遺物も発掘され、また2世紀後半のものと推定される中国の夔鳳鏡^{きほう}の断片も発掘されていて、この遺跡がかつて東西間の海上貿易港として栄えたこ

157) Chilappathikaram, xiv, ii, 66-7; Mullaipaddu, ii, 59-66 (いずれも Mookerji, p. 90の引用による。)

158) Mookerji, p. 96.

159) Wheeler, Arikamedu, p. 21.

とを示している¹⁶⁰⁾。これらの文献および考古学上の徴証は、ごくわずかにすぎないが、2世紀以降、西方世界の商人がベンガル湾をこえてさらに南シナ海方面にまで進出していったことを推測させるものがある。もっとも当時はこの方面の海域で活躍していたのは、主としてインドやインドシナあるいはインドネシアの商人であったと考えられ、この方面におもむく西方世界の商人は、あるいはかれらの船舶に便乗していったのではないかと考えられる。いずれにし

ても、1世紀の末か2世紀のはじめごろから、西方世界の商人の活動は、しだいにコロマンデル海岸から、さらにそれ以東の東アジアの方面にまで拡がっていったことが推測される。しかし、*Periplus*の書かれたころは、まだリムリケー地方の商業地がかれらの活動の中心地であり、コロマンデル海岸へは陸路によって進出していただけで、海路によるこの方面への進出はほとんど見られなかったものと考えられる。

160) 山本達郎氏「古代の南海交通と扶南の文化」(古代史講座、第13巻『古代における交易と文化交流』、学生社、昭和41年)、134-39頁；『世界考古学大系』第8巻、平凡社、昭和38年、111-12頁。